

### **3.【敷地近傍（Ⅰ）】老古美周辺において確認される ニセコ火山噴出物（火砕流堆積物）**

## 【まとめ】(1/2)

一部修正 (H29/12/8審査会合)

- 老古美周辺においては、礫混じり火山灰(軽石及びスコリアが含まれる)の層相を呈する、ニセコ火山噴出物(火砕流堆積物)が認められる。
- 当該火砕流堆積物の特徴は、以下のとおりである。

岩石記載的特徴 (P125~P127参照)

- 火山ガラス及び重鉱物の屈折率は、以下の範囲を主体とする。

(屈折率)

- ・火山ガラス : 1.497~1.505
- ・斜方輝石 : 1.700~1.716 (1.700~1.706, 1.710~1.716 bimodal)
- ・角閃石 : 1.675~1.685

- 火山ガラスの主元素組成のうち、 $TiO_2$ 、 $Na_2O$ 及び $K_2O$ は、以下の範囲を主体とする。

(主元素組成)

- ・ $TiO_2$  : 0.1~0.5wt.%
- ・ $Na_2O$  : 2.6~3.5wt.%
- ・ $K_2O$  : 3.4~4.4wt.%

噴出年代 (P128~P139参照)

- 本火砕流堆積物の給源は、ニセコ・雷電火山群のうち、白樺山、シャクナゲ岳及びチセヌプリのいずれかと推定される。
- 本火砕流堆積物は、洞爺火山灰(Toya)の下位の層準と判断される。
- 老古美地点②において、本火砕流堆積物から、フィッシュトラック法年代測定値 $0.19 \pm 0.02Ma$ を得ている。

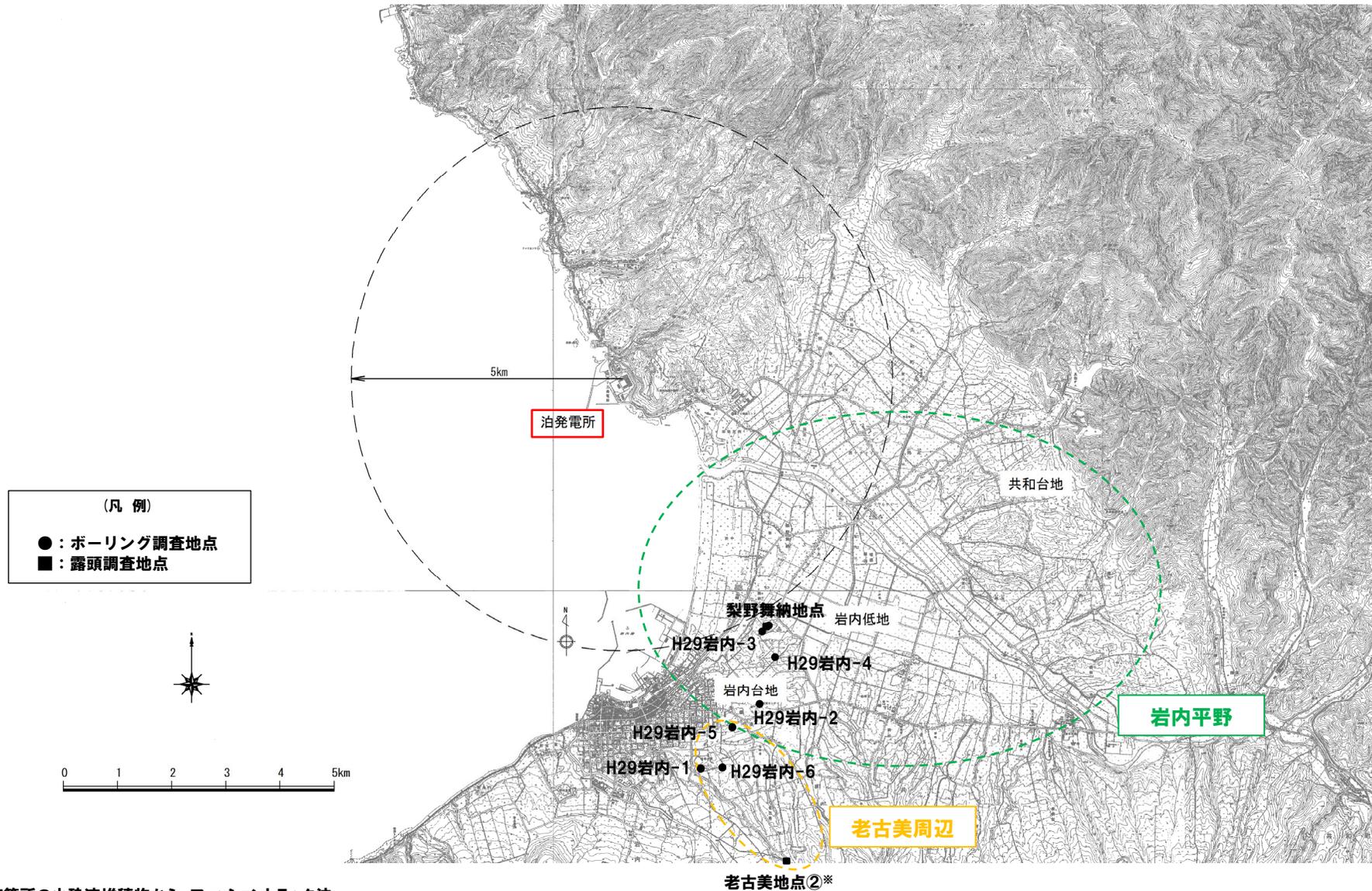
層厚 (P140~P169参照)

- 給源(シャクナゲ岳と仮定※)からの距離とニセコ火山噴出物(火砕流堆積物)の層厚の関係については、データ数が少なく、評価が難しいものの、当該堆積物が確認される調査地点のうち、シャクナゲ岳から最も遠いH29岩内-5地点における層厚は約20cmであり、この地点は、石田ほか(1991)に示された火砕流堆積物の分布範囲の末端付近に位置する。
- また、H29岩内-5地点よりも北側で実施した地質調査(H29岩内-2, H29岩内-3, H29岩内-4及び梨野舞納地点)の結果、ニセコ火山噴出物(火砕流堆積物)は確認されない。

※ニセコ火山噴出物(火砕流堆積物)の給源と推定される3火山(白樺山、シャクナゲ岳及びチセヌプリ)はいずれも近接していることを踏まえ、給源は、3火山の中央に位置するシャクナゲ岳と仮定した。

## 【まとめ】(2/2)

一部修正 (H30/5/11審査会合)



※当該箇所の火砕流堆積物から、フィッシュトラック法年代測定値 $0.19 \pm 0.02\text{Ma}$ を得ている。

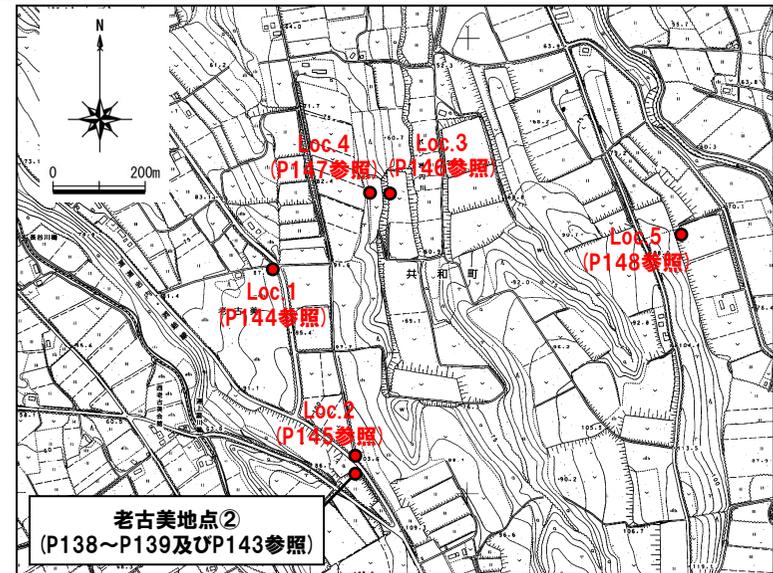
調査位置図

余白

① 岩石記載的特徴(1/3)

一部修正(H29/12/8審査会合)

- 火山ガラス及び重鉱物の屈折率は、以下の範囲を主体とする。  
(屈折率)
  - ・火山ガラス : 1.497~1.505
  - ・斜方輝石 : 1.700~1.716  
(1.700~1.706, 1.710~1.716 bimodal)
  - ・角閃石 : 1.675~1.685
- 火山ガラス及び重鉱物の屈折率は、洞爺火山灰(Toya), クッタラ第2火山灰(Kt-2) 及び支笏第1降下軽石(Spfa-1)には対比されない。



露头位置図

試料名	鉱物組成 (300粒子カウント)	備考	火山ガラスの屈折率 (nd)				斜方輝石の屈折率(γ)			角閃石の屈折率(n2)		
			1.500	1.510	1.520	1.530	1.700	1.710	1.720	1.670	1.680	1.690
老古美②	50 100 150 200 250 300		[Histogram]				[Histogram]			[Histogram]		
Loc.1(上位)		Qu含む, Gho,Biotite微量含む, ガラスはFlに付着(褐色含む)	[Histogram]				[Histogram]			[Histogram]		
Loc.1(下位)		Qu含む, Gho,Biotite微量含む, ガラスはFlに付着(褐色含む)	[Histogram]				[Histogram]			[Histogram]		
Loc.2			[Histogram]				[Histogram]			[Histogram]		
Loc.3(上位)		Qu含む, 褐色ガラス含む	[Histogram]				[Histogram]			[Histogram]		
Loc.3(下位)		Qu含む, Gho含む, 褐色ガラス含む	[Histogram]				[Histogram]			[Histogram]		
Loc.4		Qu含む, 褐色ガラス含む	[Histogram]				[Histogram]			[Histogram]		
Loc.5(上位)		Qu含む, 褐色ガラス含む	[Histogram]				[Histogram]			[Histogram]		
Loc.5(下位)		Qu含む, Gho含む, 褐色ガラス含む	[Histogram]				[Histogram]			[Histogram]		
Toya ※			1.494-1.498				1.758-1.761			1.674-1.684		
Kt-2 ※			1.505-1.515				1.712-1.718			1.678-1.684		
Spfa-1 ※			1.501-1.505				1.729-1.735			1.688-1.691		

鉱物組成凡例



老古美周辺において確認されるニセコ火山噴出物(火砕流堆積物)の火山ガラス及び重鉱物分析結果

※町田・新井(2011)

3. 【敷地近傍(1)】 老古美周辺において確認されるニセコ火山噴出物(火砕流堆積物)

① 岩石記載的特徴(2/3)

一部修正(H29/12/8審査会合)

○火山ガラスの主元素組成のうち、 $TiO_2^{*1}$ 、 $Na_2O^{*2}$ 及び $K_2O^{*1,2}$ は、以下の範囲を主体とする( $K_2O-TiO_2$ 図及び $K_2O-Na_2O$ 図は次頁参照)。

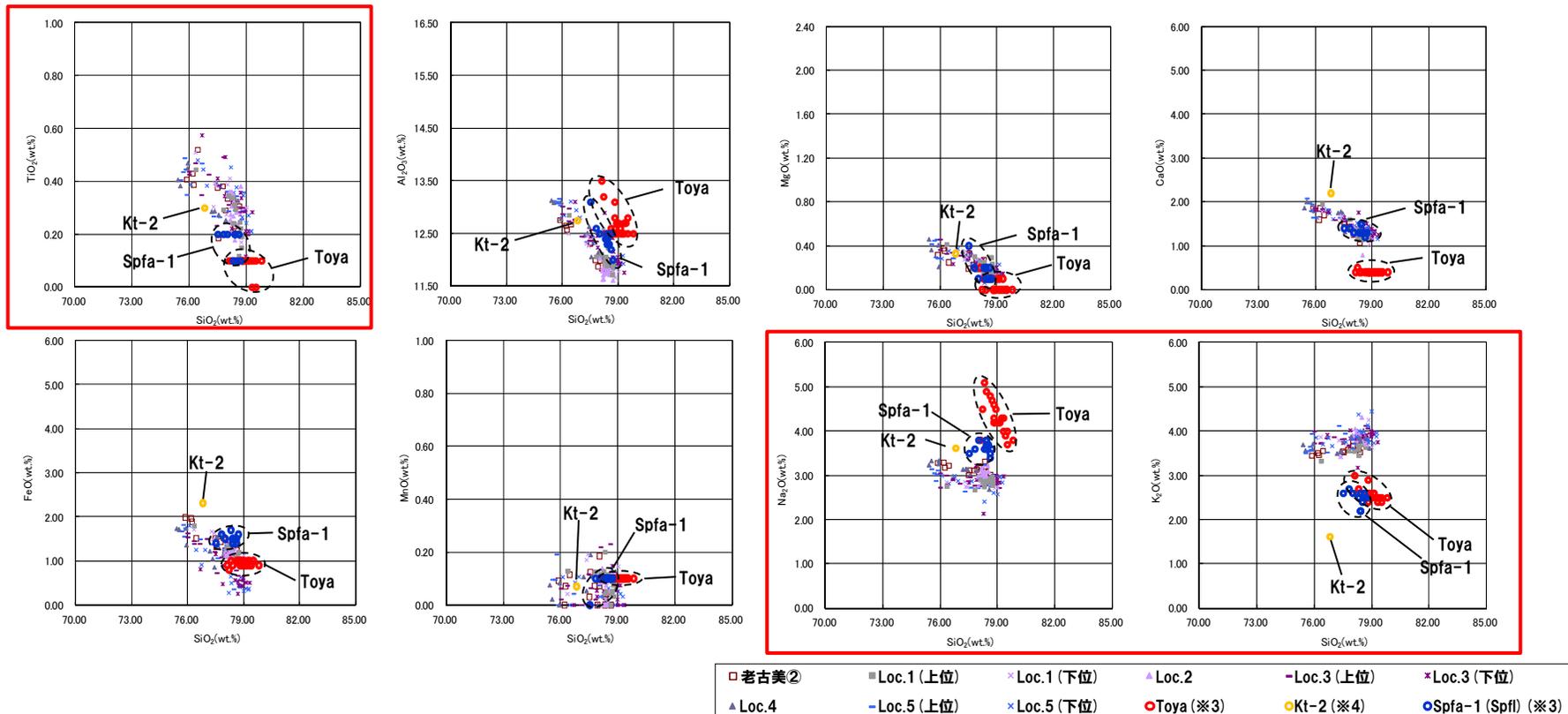
(主元素組成)

- $TiO_2$  : 0.1~0.5wt.%
- $Na_2O$  : 2.6~3.5wt.%
- $K_2O$  : 3.4~4.4wt.%

○火山ガラスの主元素組成は、洞爺火山灰(Toya)、クツタラ第2火山灰(Kt-2)及び支笏第1降下軽石(Spfa-1)には対比されない。

※1 和田ほか(2001)によれば、主要元素の中で、KとTiは、珪長質マグマ・タイプの違いを最も良く反映する元素であり、 $K_2O-TiO_2$ 図でガラス組成の違いが明瞭に表れることから、しばしば給源火山の推定に使われてきた、とされており、青木・町田(2006)においては、日本に分布する第四紀後期広域テフラの識別にあたり、 $K_2O-TiO_2$ 図を用いている。

※2 本火砕流堆積物は、洞爺火山灰(Toya)、クツタラ第2火山灰(Kt-2)及び支笏第1降下軽石(Spfa-1)と比較して、特に $Na_2O$ 及び $K_2O$ の値が異なる。

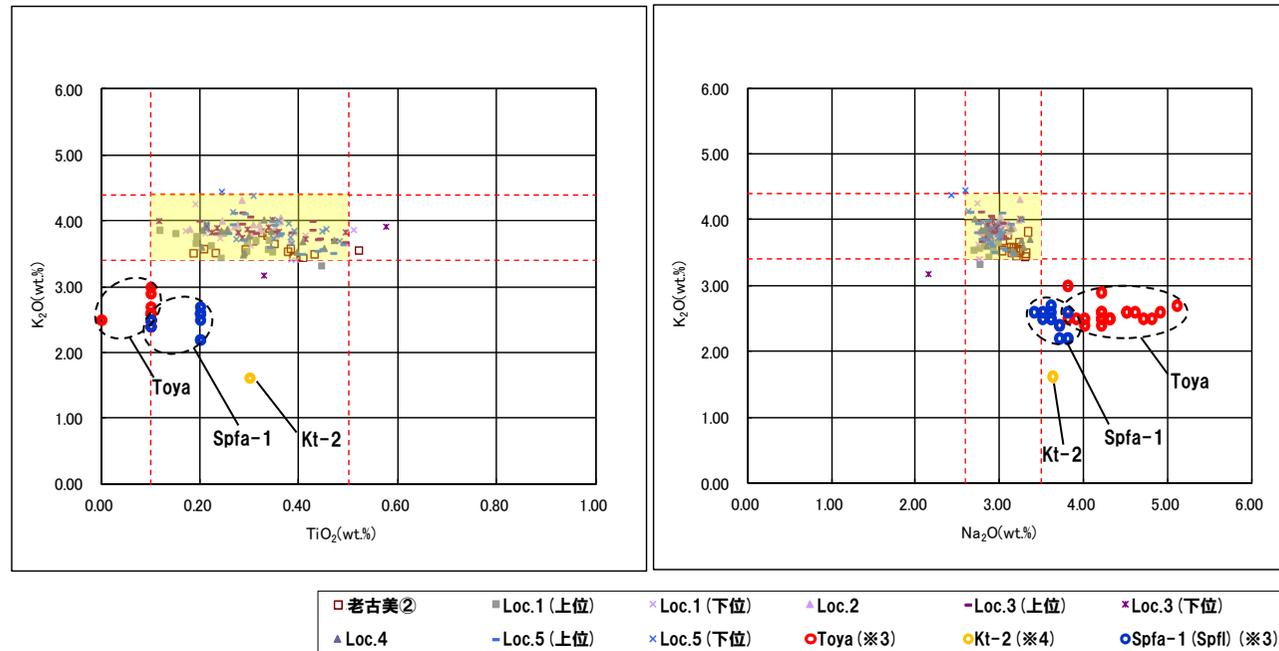


火山ガラスの主元素組成(ハーカー図)

※3 町田・新井(2011), ※4 青木・町田(2006)

## ① 岩石記載的特徴(3/3)

一部修正(H29/12/8審査会合)



※3 町田・新井(2011), ※4 青木・町田(2006)

火山ガラスの $K_2O$ - $TiO_2$ 図(左図),  $K_2O$ - $Na_2O$ 図(右図)

3.【敷地近傍(Ⅰ)】老古美周辺において確認されるニセコ火山噴出物(火砕流堆積物)

②-1 噴出年代(給源の推定)(1/2)

一部修正(H29/12/8審査会合)

【ニセコ・雷電火山群の活動の変遷】

- 新エネルギー総合開発機構(1986)によれば、ニセコ・雷電火山群の活動は、第1~3期に分類されるとされている。
- 児玉ほか(1998)によれば、ニセコ・雷電火山群の活動は全体として東部に移動しているとされている。
- 勝井ほか(2007)によれば、ニセコ火山の山体形成は、西側からしだいに東側へと波及してゆき、イワオヌプリの活動が最も新しいとされている。

【普通角閃石の含有】

- 大場(1960)によれば、ニセコ・雷電火山群の活動後期になって特徴的に角閃石を含む岩石型が現れるとされている。
- 児玉ほか(1998)及び日本地質学会編(2010)によれば、ニセコ・雷電火山群は、雷電山前期・ワイスホルン・ニセコアンヌプリ前期がソレアイト系列、それ以外の火山がカルクアルカリ系列であるとされ、前者には普通角閃石を含有せず、後者の大部分には普通角閃石を含有するとされている。

□ : カルクアルカリ系列 (普通角閃石を含む)

□ : ソレアイト系列 (普通角閃石を含まない)

文献記載のニセコ・雷電火山群の活動時期まとめ

	大場(1960)	NEDO(1986)	日本地質学会編(2010)	Oka et al.(2023)
イワオヌプリ	最新期ニセコ火山群	第3期 (0.3-0.01Ma)	新期火山群 (0.3-<0.2Ma)	newer volcanoes (<0.1Ma-<10ka)
チセヌプリ				
ニトヌプリ				
白樺山	新期ニセコ火山群	第2期 (1.1-0.1Ma)	中期火山群 (0.8-0.25Ma)	(0.5-0.1Ma)
シャクナゲ岳				
ニセコアンヌプリ				
目国内岳				
岩内岳	旧期ニセコ火山群	第1期 (1.6-1.0Ma)	古期火山群 (2.03-0.5Ma)	early stage (>0.5Ma)
ワイスホルン				
雷電山				

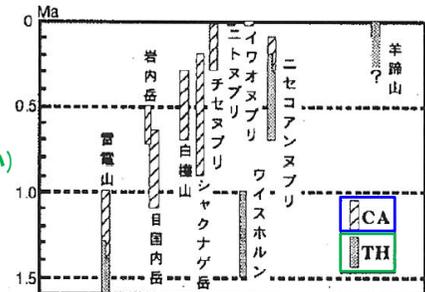


図 ニセコ火山群・羊蹄火山の位置と活動年代  
年代値はNEDO(1985)より引用

※CA: カルクアルカリ系列, TH: ソレアイト系列

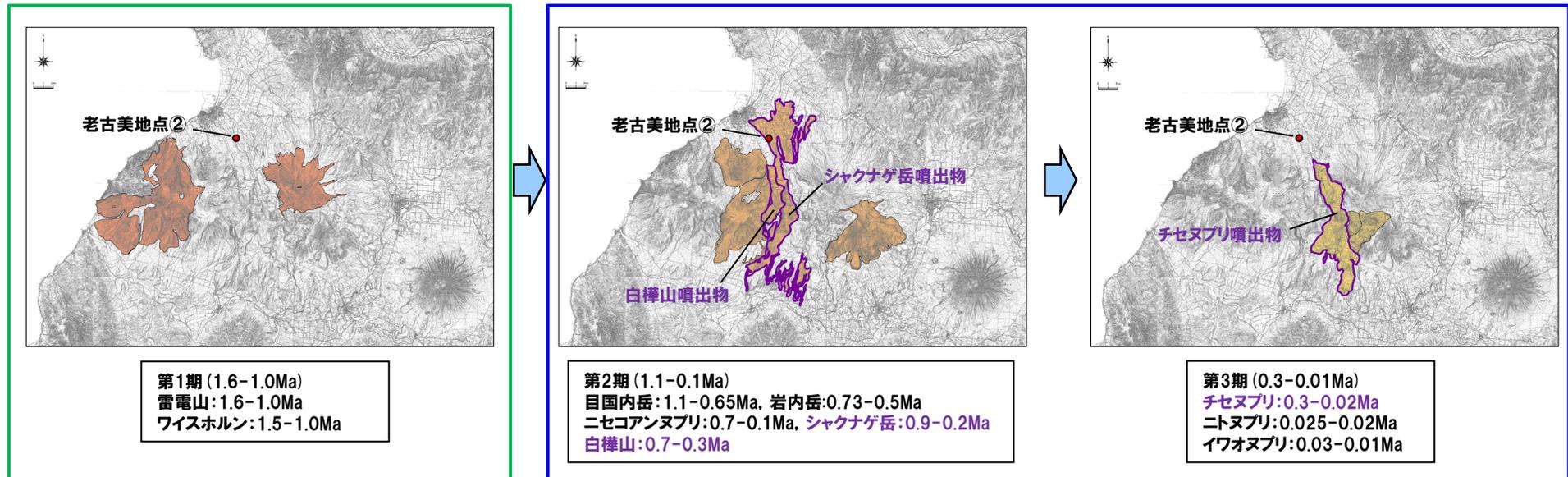
ニセコ火山群・羊蹄火山の位置と活動年代  
(児玉ほか,1998に加筆)

## ②-1 噴出年代(給源の推定)(2/2)

一部修正(H29/12/8審査会合)

普通角閃石を含まない(ただし、雷電山後期を除く)

普通角閃石を含む(ただし、ニセコアンヌプリ前期を除く)



## ニセコ・雷電火山群の活動の変遷

(地質分布は新エネルギー総合開発機構(1987a)を複写, 年代値は新エネルギー総合開発機構(1986)による)



○老古美周辺において確認されるニセコ火山噴出物(火砕流堆積物)は、普通角閃石を含有することから、ニセコ・雷電火山群のうち、新エネルギー総合開発機構(1986,1987a)の第2~3期の活動による噴出物と推定され、老古美との位置関係、地形状況等より、白樺山、シャクナゲ岳及びチセヌプリのいずれかが給源と推定される。

## ②-2 噴出年代(H29岩内-5及びH29岩内-1ボーリング調査)(1/7)

一部修正(H29/12/8審査会合)

○石田ほか(1991)における火砕流堆積物分布範囲の境界付近であるH29岩内-5ボーリング調査地点において、火山ガラス及び重鉍物の火山灰分析(P132~P135参照)より、以下を確認している。

(深度4.46~5.16m:火山灰質砂質シルト)

・R3.10.14審査会合以前に実施した火山灰分析(火山ガラスの形態、火山ガラス及び重鉍物の屈折率並びに火山ガラスの主元素組成)の結果、試料aについては、洞爺火山灰(Toya)に対比される火山灰の他、阿蘇4火山灰(Aso-4)がわずかに認められ、試料b及びcについては、洞爺火山灰(Toya)に対比される。

【追加火山灰分析(R3.10.14審査会合以降)】

✓積丹半島西岸で実施した神恵内M-2ボーリングにおいては、洞爺火山灰(Toya)の降灰層準と阿蘇4火山灰(Aso-4)の降灰層準の間には火山ガラスの粒子数が少ない層準が認められる(200/3000粒子未満、P392参照)ことから、阿蘇4火山灰(Aso-4)がわずかに認められる試料aの下位(深度4.60~4.90m)について、火山ガラスの粒子数の状況を確認するため、R3.10.14審査会合以降、追加火山灰分析(組成分析)を実施した。

✓追加火山灰分析の結果、深度4.60~4.90mは、いずれの試料においても基質部分に火山ガラスを多く含んでいる(1000/3000粒子以上、P135参照)。

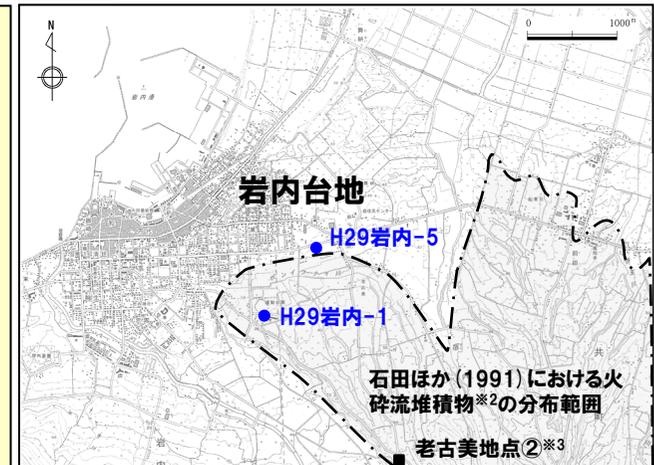
・阿蘇4火山灰(Aso-4)がわずかに認められる試料aと洞爺火山灰(Toya)に対比される試料bとの間に火山ガラスの粒子数が少ない層準が認められないこと及び当該火山灰質砂質シルトの上位は盛土であることから、試料aにおいてわずかに認められる阿蘇4火山灰(Aso-4)は、後天的に混入した可能性が考えられる。

・このため、当該火山灰質砂質シルトは、基質部分に洞爺火山灰(Toya)の火山ガラスを多く含む(140/300粒子以上又は1000/3000粒子以上)ことから、洞爺火山灰(Toya)の純層(層厚:少なくとも70cm)に区分される\*1。

(深度13.38~13.54m:火山灰質シルト)

・R3.10.14審査会合以前に実施した火山灰分析(火山ガラス及び重鉍物の屈折率並びに火山ガラスの主元素組成)の結果、試料eで確認されるテフラは、老古美周辺において確認されるニセコ火山噴出物(火砕流堆積物)に対比される。

○なお、近接するH29岩内-1ボーリング調査地点では、老古美周辺において確認されるニセコ火山噴出物(火砕流堆積物)が連続することを確認している(P136~P137参照)。



●: ボーリング調査地点

■: 露頭調査地点

位置図

\*2 当社が「ニセコ火山噴出物(火砕流堆積物)」と呼称しているものに該当する。

\*3 当該箇所の火砕流堆積物から、フィッシュトラック法年代測定値0.19±0.02Maを得ている。

\*1 当該火山灰質砂質シルトは、以下を踏まえると、降下火砕物(洞爺火山灰(Toya)由来の可能性が示唆される)。  
 ・当該堆積物には、洞爺火山灰(Toya)に対比される火山ガラスが多く認められる。  
 ・当該堆積物には、近接する共和町幌似付近に認められる洞爺火砕流堆積物とは異なり、軽石が認められない。

当該堆積物を降下火砕物由来であるとした場合、本質物である火山ガラスの粒子数等を踏まえると、洞爺火山灰(Toya)の純層に区分される(火山ガラスの粒子数等に着目した、降下火砕物の純層又は二次堆積物への細区分の考え方については、P26~P27参照)。

しかし、別途整理した「火砕流堆積物及び降下火砕物の区分の考え方(P28~P33参照)」に基づくと、軽石が混じる洞爺火砕流本体と比較して細粒な火砕サージについても目視可能な軽石が存在するかは明確ではない。

加えて、淘汰度の観点も踏まえると、当該堆積物の様な、目視可能な軽石を含まず、洞爺火山灰(Toya)の火山ガラスを多く含む堆積物については、火砕サージ由来か降下火砕物由来かを厳密に区分することは難しいと評価している。

○老古美周辺において確認されるニセコ火山噴出物(火砕流堆積物)は、洞爺火山灰(Toya)の下位の層準と判断される。

## ②-2 噴出年代(H29岩内-5及びH29岩内-1ボーリング調査)(2/7)

一部修正(H29/12/8審査会合)



H29岩内-5コア写真(深度0~15m, 標高23.24~8.24m)



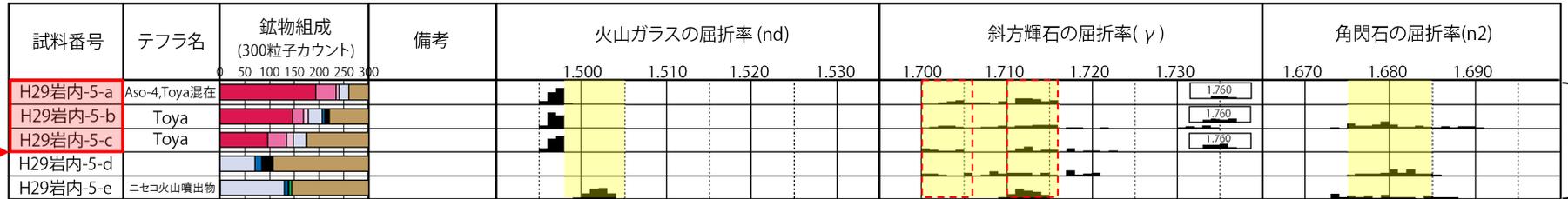
H29岩内-5コア写真(深度15~30m, 標高8.24~-6.76m)

3. 【敷地近傍(Ⅰ)】老古美周辺において確認されるニセコ火山噴出物(火砕流堆積物)

②-2 噴出年代(H29岩内-5及びH29岩内-1ボーリング調査)(3/7)

一部修正(H29/12/8審査会合)

老古美周辺において確認されるニセコ火山噴出物(火砕流堆積物)の主要範囲(屈折率)



鉱物組成凡例

- バブルウォール(Bw)タイプガラス
- ハミス(Pm)タイプガラス
- 板状型(O)タイプガラス
- Pl:斜方輝石
- Opx:斜方輝石
- Cpx:斜方輝石
- Gln:緑色斜方角閃石
- Oth:その他の重鉱物
- Opq:不透明鉱物
- Rock:岩片・風化粒

- : 洞爺火山灰 (Toya) の降灰層準
- : 洞爺火山灰 (Toya) の純層

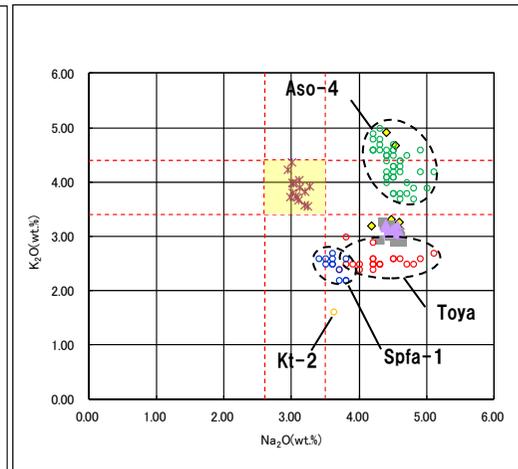
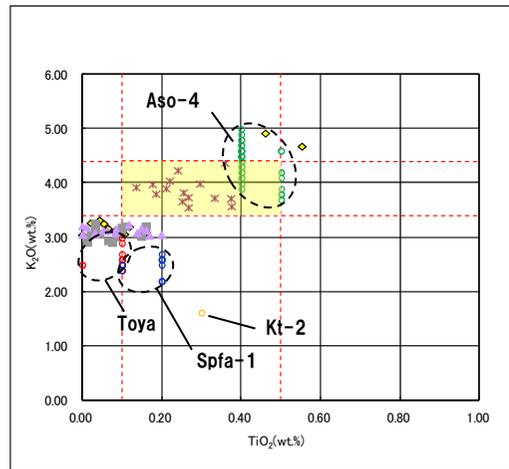
当該堆積物は、火山灰分析結果の図において、降下火砕物由来として示しているが、火砕サージ由来か降下火砕物由来かを厳密に区分することは難しいと評価している。

火山ガラス及び重鉱物分析結果(H29岩内-5)

(参考) 阿蘇4火山灰(Aso-4)及び洞爺火山灰(Toya)の屈折率(町田・新井, 2011より)

テフラ名	特徴	火山ガラス	斜方輝石	角閃石
Aso-4	バブルウォールタイプ・ハミスタイプの火山ガラス主体	1.506-1.510	1.699-1.701	1.685-1.691
Toya	バブルウォールタイプ・ハミスタイプの火山ガラス主体	1.494-1.498	1.711-1.761 (1.758-1.761, 1.712-1.729 bimodal)	1.674-1.684

R3.10.14 審査会合以前に実施



老古美周辺において確認されるニセコ火山噴出物(火砕流堆積物)の主要範囲(火山ガラスのTiO<sub>2</sub>, Na<sub>2</sub>O, K<sub>2</sub>O)

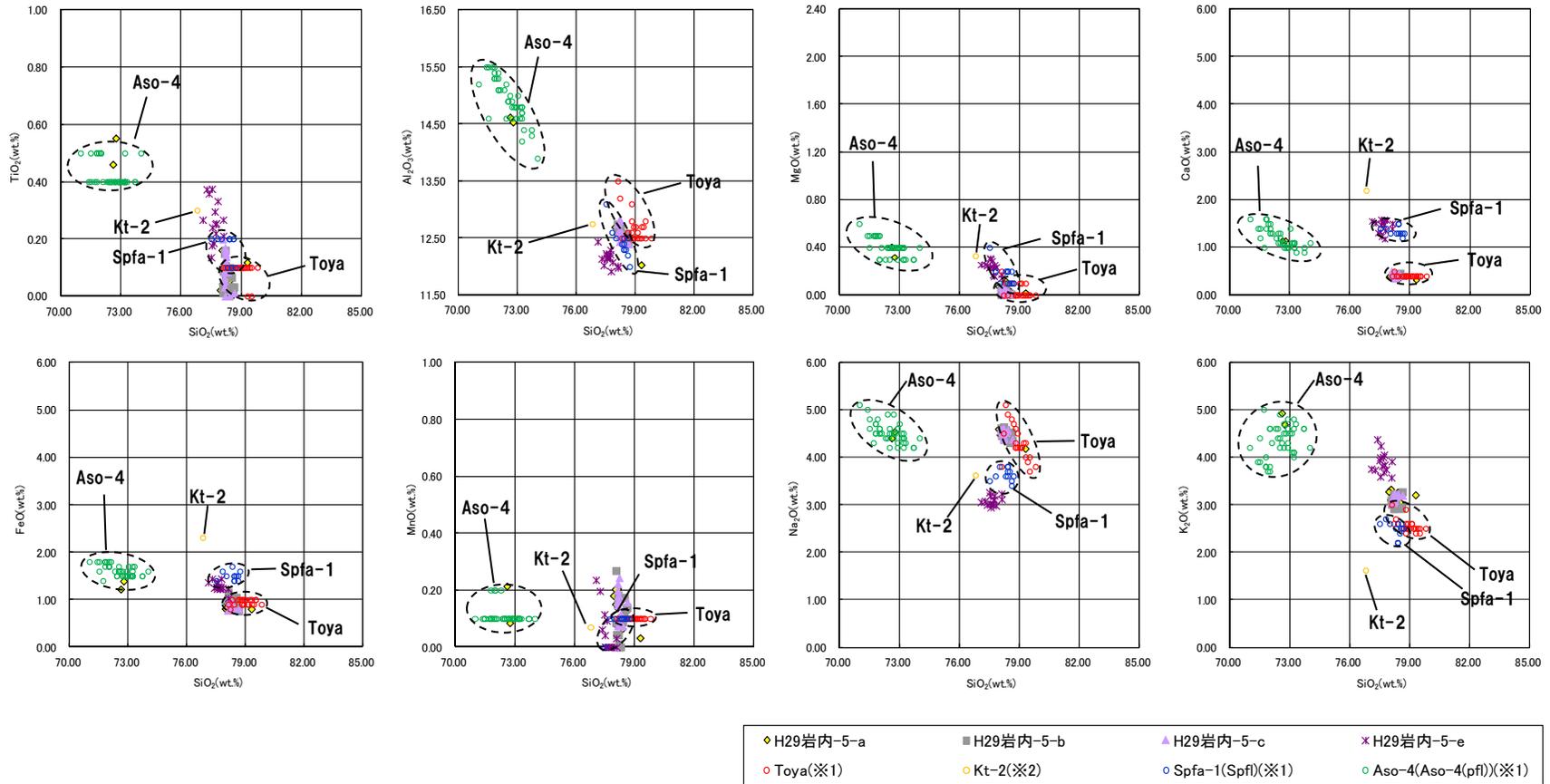
- ◆ H29岩内-5-a
- H29岩内-5-b
- ▲ H29岩内-5-c
- × H29岩内-5-e
- Toya(※1)
- Kt-2(※2)
- Spfa-1(Spfl)(※1)
- Aso-4(Aso-4(pfl))(※1)

※1 町田・新井(2011), ※2 青木・町田(2006)

火山ガラスのK<sub>2</sub>O-TiO<sub>2</sub>図(左図), K<sub>2</sub>O-Na<sub>2</sub>O図(右図)(H29岩内-5)(R3.10.14審査会合以前に実施)

②-2 噴出年代(H29岩内-5及びH29岩内-1ボーリング調査)(4/7)

一部修正(H29/12/8審査会合)



※1 町田・新井(2011), ※2 青木・町田(2006)

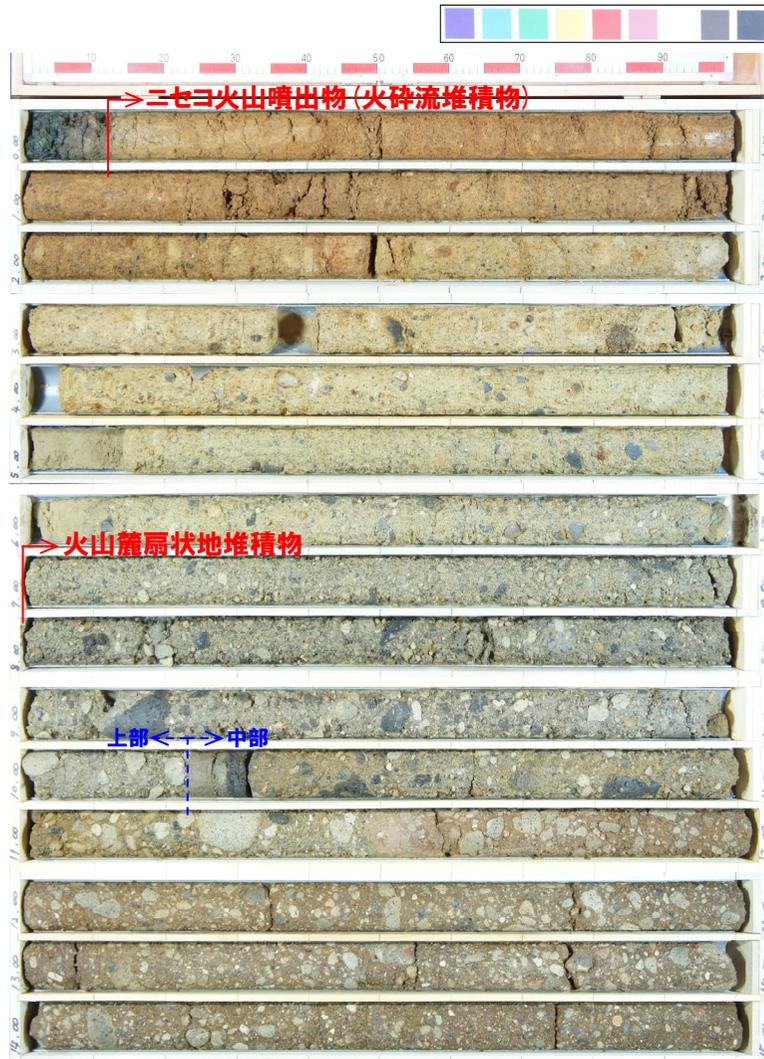
火山ガラスの主元素組成(ハーカー図)(H29岩内-5)  
(R3.10.14審査会合以前に実施)

余白

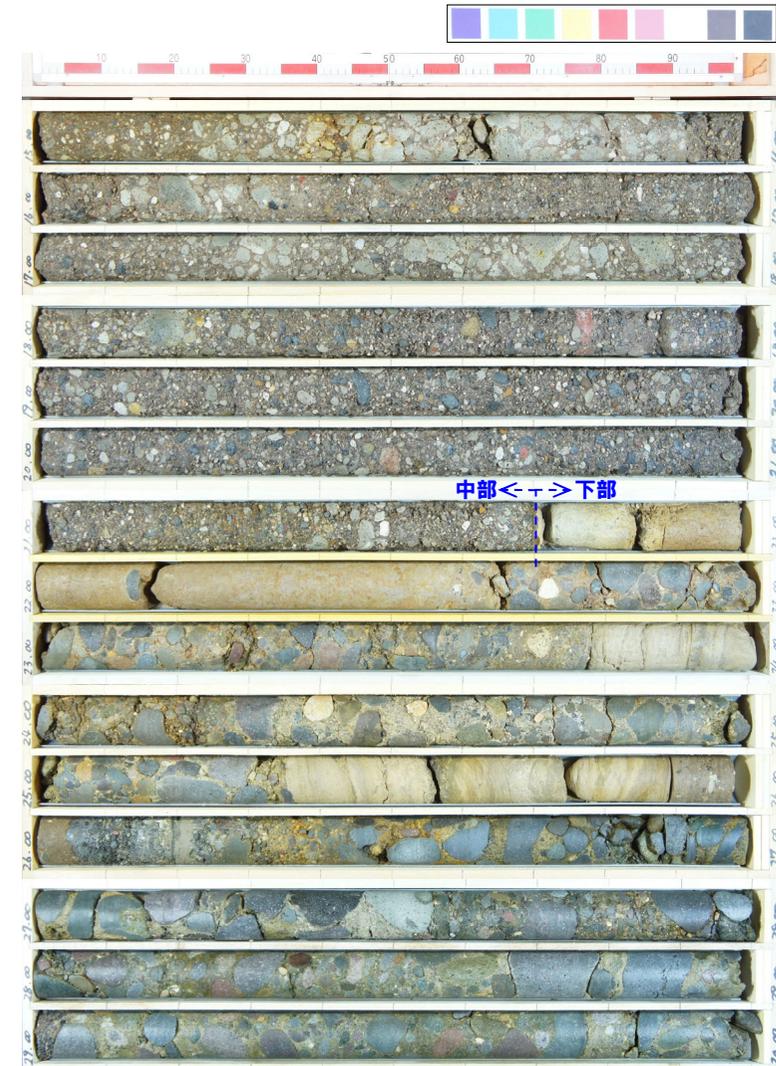


## ②-2 噴出年代(H29岩内-5及びH29岩内-1ボーリング調査)(6/7)

再掲(H29/12/8審査会合)



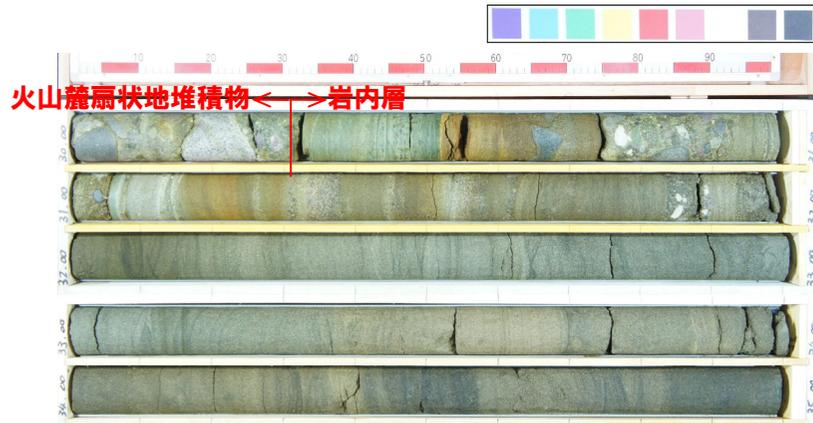
H29岩内-1コア写真(深度0~15m, 標高32.22~17.22m)



H29岩内-1コア写真(深度15~30m, 標高17.22~2.22m)

## ②-2 噴出年代(H29岩内-5及びH29岩内-1ボーリング調査)(7/7)

再掲(H29/12/8審査会合)



H29岩内-1コア写真(深度30~35m, 標高2.22~2.78m)

3. 【敷地近傍(1)】 老古美周辺において確認されるニセコ火山噴出物(火砕流堆積物)

②-3 噴出年代(老古美地点②)(1/2)

一部修正(H28/3/10審査会合)

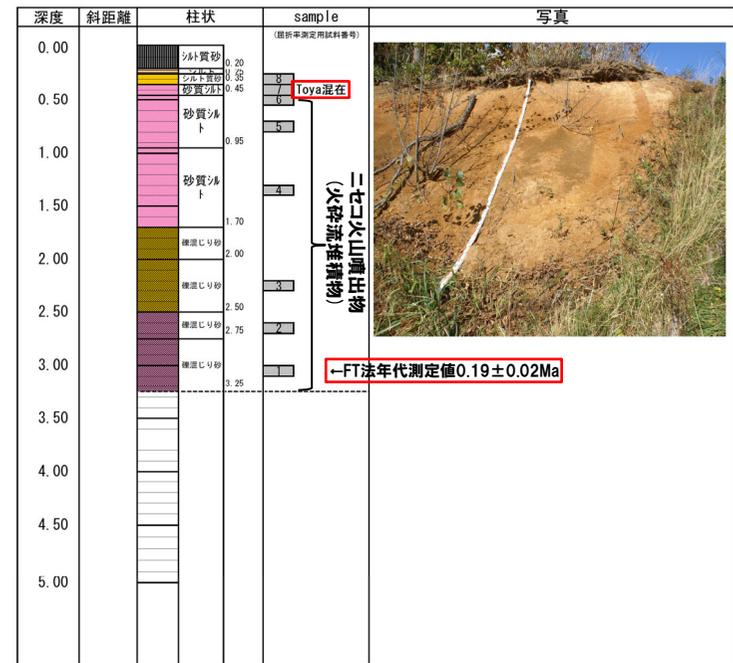
○老古美地点②における火山ガラス及び重鉱物分析より、以下の結果を確認している。

- ・砂質シルト層中の試料7において、火山ガラスの形態及び火山ガラスの屈折率から、洞爺火山灰(Toya)に対比される火山ガラスの混在が確認される。
- ・ニセコ火山噴出物(火砕流堆積物)中の試料1について、フィッシュトラック法年代測定値 $0.19 \pm 0.02\text{Ma}$ を得ている。



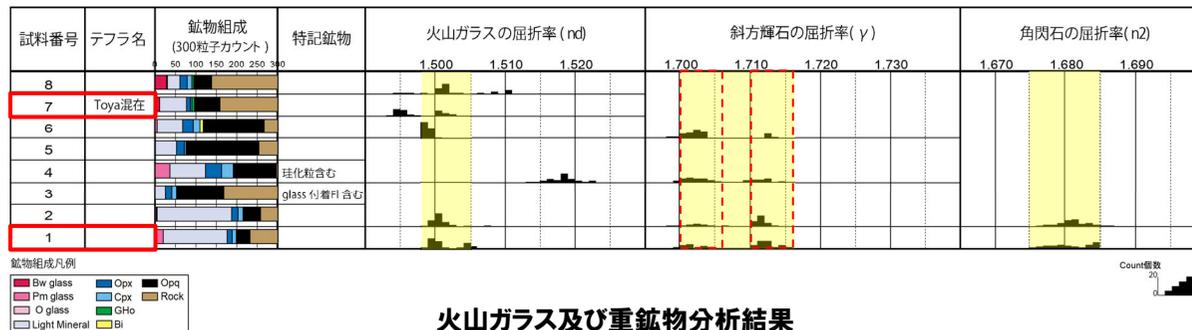
※1 当社が「ニセコ火山噴出物(火砕流堆積物)」と呼称しているものに該当する。  
 ※2 当該箇所の火砕流堆積物から、フィッシュトラック法年代測定値 $0.19 \pm 0.02\text{Ma}$ を得ている。

調査位置図



露頭柱状図

老古美周辺において確認されるニセコ火山噴出物(火砕流堆積物)の主要範囲(屈折率)



火山ガラス及び重鉱物分析結果

(参考) 洞爺火山灰(Toya) 屈折率(町田・新井, 2011)

火山灰	屈折率		
	火山ガラス	斜方輝石	角閃石
Toya	1.494-1.498	1.758-1.761, 1.712-1.729	1.674-1.684

## ②-3 噴出年代(老古美地点②)(2/2)

一部修正(H29/3/10審査会合)

- 老古美地点②におけるニセコ火山噴出物(火砕流堆積物)中の試料1について、フィッシュトラック法年代測定を実施した。
- 測定は、試料中のジルコン結晶を対象としたED1法により実施した。

## フィッシュトラック法年代測定結果

試料名	粒子数	$\rho_s(N_s)$ ( $\times 10^6/\text{cm}^2$ )	$\rho_i(N_i)$ ( $\times 10^6/\text{cm}^2$ )	$P(X^2)$ (%)	$\rho_d(N_d)$ ( $\times 10^5/\text{cm}^2$ )	r	U (ppm)	age $\pm 1\sigma$ (Ma)
老古美② 試料1	75	0.0274(77)	2.9971(8410)	61.1	1.1437(6043)	0.1	332	0.19 $\pm$ 0.02

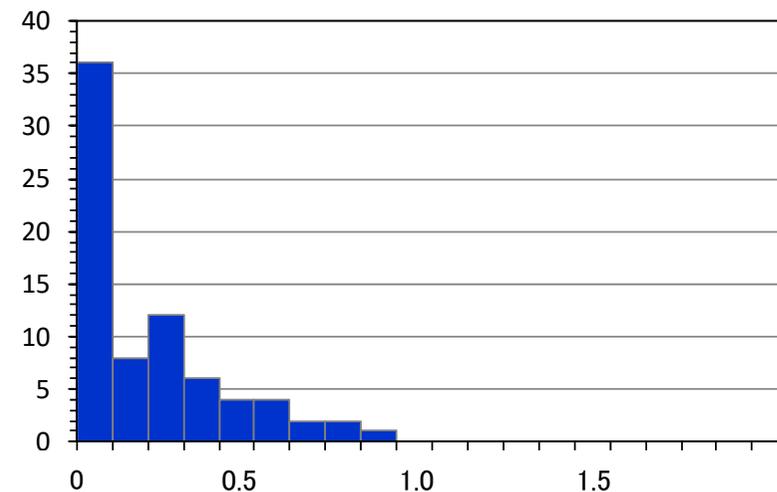
- $\rho_s(N_s)$  : 自発トラック密度(数)
- $\rho_i(N_i)$  : 誘発トラック密度(数)
- $P(X^2)$  : カイ二乗確率
- $\rho_d(N_d)$  : 線量測定用標準ガラスの誘発トラック密度(数)
- r : 自発トラック密度と誘発トラック密度の相関係数
- U : ウラン濃度

## 【年代値算出式】

$$\text{年代値 } T = \frac{1}{\lambda_d} \ln\left(1 + \lambda_d \zeta \frac{\rho_s}{\rho_i} g \rho_d\right)$$

$$\text{誤差}(1\sigma) \text{ error} = \sqrt{\frac{1}{N_s} + \frac{1}{N_i} + \frac{1}{N_d} + \left(\frac{\zeta_{\text{std.dev.}}}{\zeta}\right)^2}$$

- $\lambda_d$  :  $^{238}\text{U}$ の全壊変定数= $1.480 \times 10^{-10}$
- $\zeta$  : 較正定数, 本試験の場合= $377.9 \pm 5.1$
- g : ジオメトリファクター, 研磨面(本試料)の場合=0.5
- $\zeta_{\text{std.dev.}}$  : 較正定数の誤差, 本試験の場合=5.1



各粒子の年代測定値ヒストグラム(Ma)  
(ゼロトラック粒子を35粒子含む)

## ③-1 層厚(給源からの距離と層厚の関係)(1/3)

一部修正(R5/1/20審査会合)

- ニセコ火山噴出物(火砕流堆積物)について、給源からの距離と層厚の関係を確認するため、当該堆積物が認められる老古美周辺の調査地点及び岩内台地における調査地点(次頁左図参照)の層厚を整理した。
- 整理に当たり、ニセコ火山噴出物(火砕流堆積物)の給源を定める必要があるが、給源と推定される3火山(白樺山、シャクナゲ岳及びチセヌプリ)はいずれも近接していることを踏まえ、給源は、3火山の中央に位置するシャクナゲ岳と仮定した。
- なお、R3.10.14審査会合以降に実施した網羅的な文献調査においては、ニセコ・雷電火山群を給源とする火砕流堆積物の層厚を明記した調査結果等は確認されていない。



- 給源(シャクナゲ岳と仮定)からの距離とニセコ火山噴出物(火砕流堆積物)の層厚の関係については、データ数が少なく、評価が難しいものの、当該堆積物が確認される調査地点のうち、シャクナゲ岳から最も遠いH29岩内-5地点における層厚は約20cmであり、この地点は、石田ほか(1991)に示された火砕流堆積物の分布範囲の末端付近に位置する。
- また、H29岩内-5地点よりも北側で実施した地質調査(H29岩内-2, H29岩内-3, H29岩内-4及び梨野舞納地点)の結果、ニセコ火山噴出物(火砕流堆積物)は確認されない。

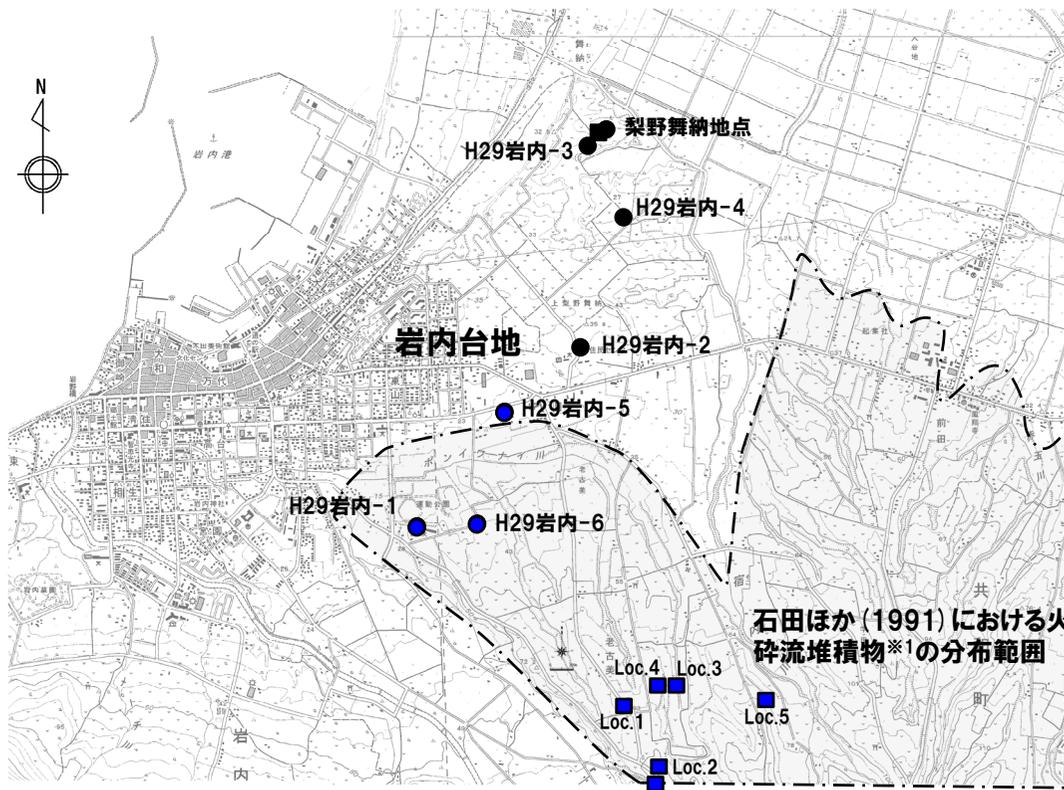
ニセコ火山噴出物(火砕流堆積物)の給源からの距離と層厚

地点名	給源(シャクナゲ岳と仮定)からの距離(km)	層厚(m)	調査結果掲載頁
老古美地点②(露頭)	約8.0km	>3m	P143
Loc.1(露頭)	約8.5km	>8m	P144
Loc.2(露頭)	約8.1km	>5m	P145
Loc.3(露頭)	約8.6km	>15m*	P146
Loc.4(露頭)	約8.6km		P147
Loc.5(露頭)	約8.4km	>7m	P148
H29岩内-1(ボーリング)	約10.1km	>6.9m	P136~P137
H29岩内-5(ボーリング)	約10.6km	0.2m	P130~P135
H29岩内-6(ボーリング)	約10.0km	>6.2m	P150~P153
H29岩内-2(ボーリング)	約10.9km	確認されない	P154~P157
H29岩内-3(ボーリング)	約12.2km	確認されない	P158~P159
H29岩内-4(ボーリング)	約11.7km	確認されない	P160~P161
梨野舞納地点(露頭及びボーリング)	約12.2km	確認されない	P162~P169

※Loc.3及びLoc.4は同一露頭であり、露頭下部をLoc.3、露頭上部をLoc.4としていることから、それぞれで認められるニセコ火山噴出物(火砕流堆積物)の層厚(Loc.3:>7m, Loc.4:>8m)を合わせて示している。

③-1 層厚 (給源からの距離と層厚の関係) (2/3)

再掲 (R5/1/20審査会合)

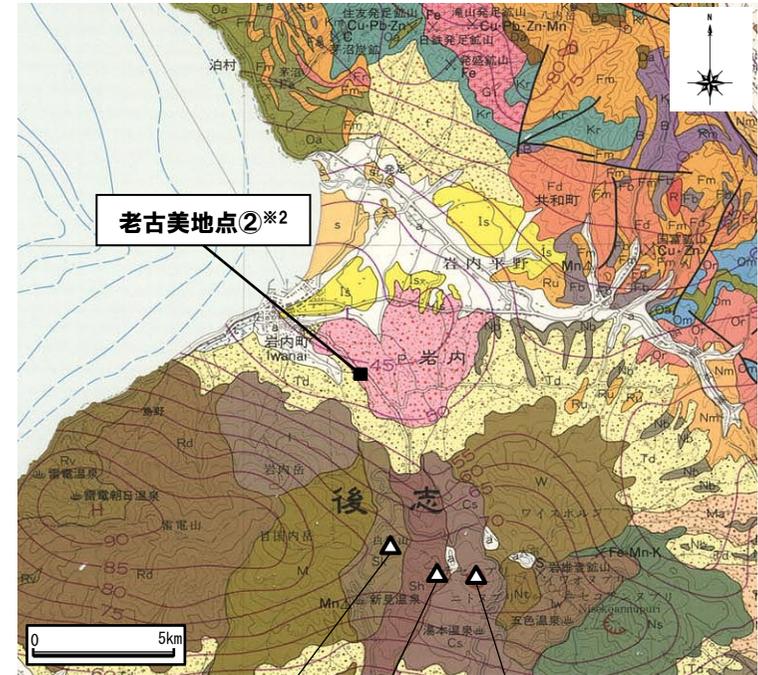


- :ボーリング調査地点(ニセコ火山噴出物(火砕流堆積物)確認)
- :ボーリング調査地点(ニセコ火山噴出物(火砕流堆積物)未確認)
- :露頭調査地点(ニセコ火山噴出物(火砕流堆積物)確認)
- :露頭調査地点(ニセコ火山噴出物(火砕流堆積物)未確認)

調査位置図

老古美地点②※2

- ※1 当社が「ニセコ火山噴出物(火砕流堆積物)」と呼称しているものに該当する。
- ※2 当該箇所の火砕流堆積物から、フィッシュトラック法年代測定値0.19±0.02Maを得ている。



白樺山 シャクナゲ岳 チセヌプリ  
老古美露頭周辺の地質図(石田ほか(1991)に加筆)

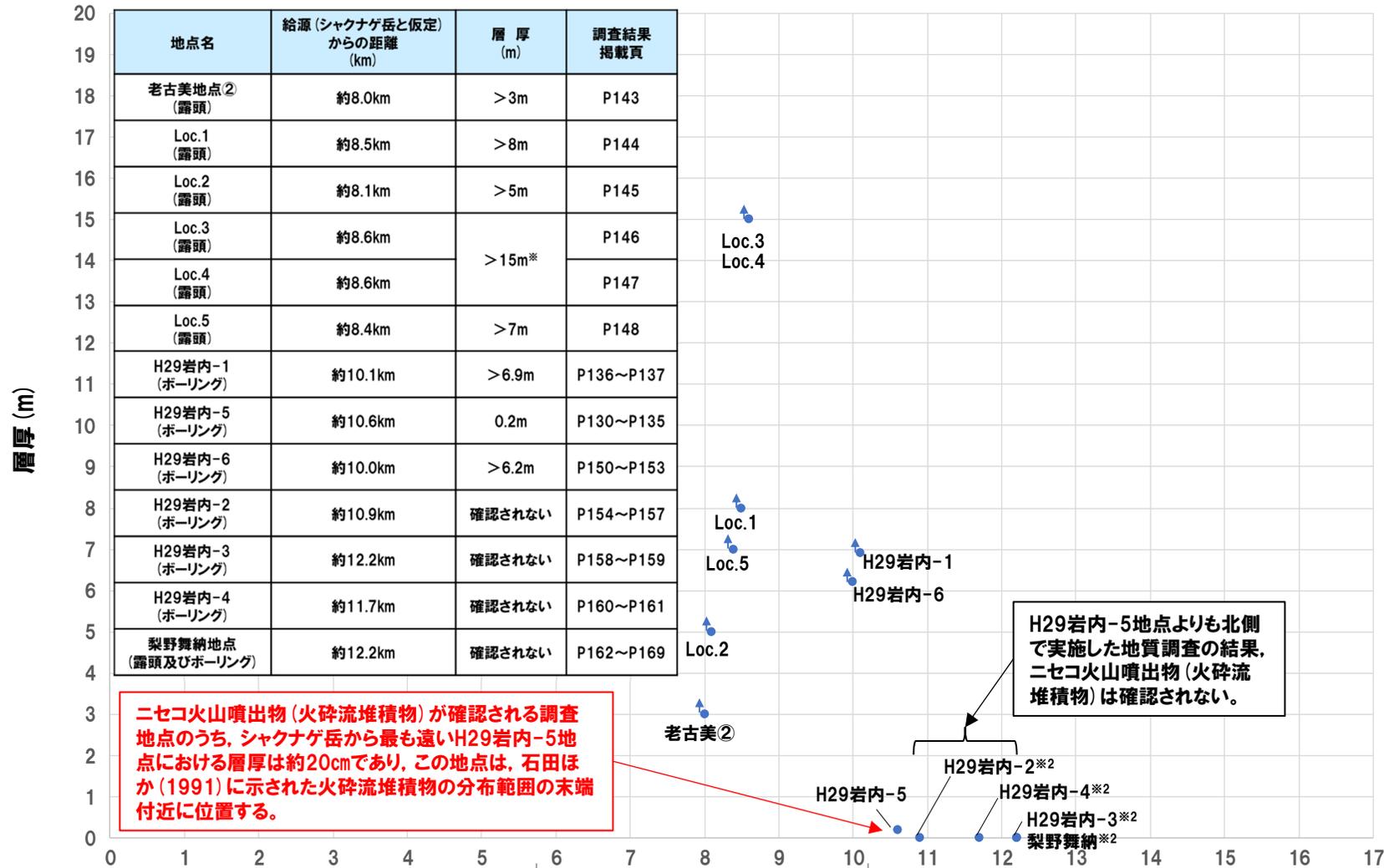
凡例(地質図)(ニセコ火山群抜粋)

イワオヌプリ火山 Iwaonupuri Volcano	Pyroxene andesite lava and pyroclastic rock, with lake deposit	lw	輝石安山岩溶岩及び火砕岩、湖成堆積物を伴う
ニトヌプリ火山 Nitonupuri Volcano	Pyroxene andesite lava and pyroclastic rock	Nt	輝石安山岩溶岩及び火砕岩
チセヌプリ火山 Chisenupuri Volcano	Pyroxene andesite lava and pyroclastic rock	Cs	輝石安山岩溶岩及び火砕岩
ニセコアヌヌプリ火山 Nisekoanusupuri Volcano	Pyroxene andesite lava and pyroclastic rock	Ns	輝石安山岩及び火砕岩
シャクナゲ岳火山 Shakunagedake Volcano	Pyroxene andesite lava and pyroclastic rock	Sh	輝石安山岩溶岩及び火砕岩
白樺山火山 Shirakabayama Volcano	Pyroxene andesite lava and pyroclastic rock	Sk	輝石安山岩溶岩及び火砕岩
ワイスホルン火山 Waisuhoron Volcano	Pyroxene andesite lava and pyroclastic rock	W	輝石安山岩溶岩及び火砕岩
火砕流堆積物 Pyroclastic flow deposits	Pyroxene andesite pumice, scoria and volcanic ash	p	輝石安山岩軽石・スコリア及び火山灰

3.【敷地近傍(Ⅰ)】老古美周辺において確認されるニセコ火山噴出物(火砕流堆積物)

③-1 層厚(給源からの距離と層厚の関係)(3/3)

一部修正(R5/1/20審査会合)



※1 Loc.3及びLoc.4は同一露頭であり、露頭下部をLoc.3、露頭上部をLoc.4としていることから、それぞれ認められるニセコ火山噴出物(火砕流堆積物)の層厚(Loc.3:>7m, Loc.4:>8m)を合わせて示している。

ニセコ・雷電火山群(シャクナゲ岳)からの距離(km)

※2 ニセコ火山噴出物(火砕流堆積物)が確認されない調査地点については、層厚「0」として便宜的にプロットしている。

洞爺火砕流堆積物の洞爺カルデラからの距離と層厚(当社地表地質踏査結果に基づき作成)

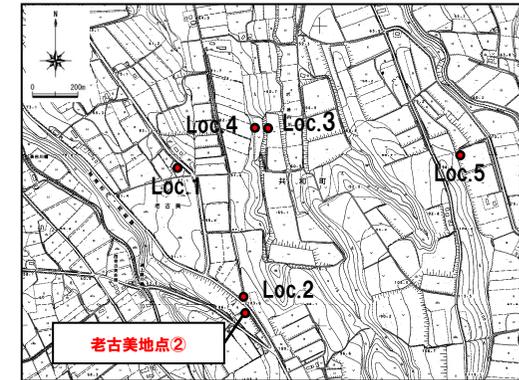
### 3.【敷地近傍(1)】老古美周辺において確認されるニセコ火山噴出物(火砕流堆積物)

#### ③-2 層厚 (地質調査結果-老古美地点②-)

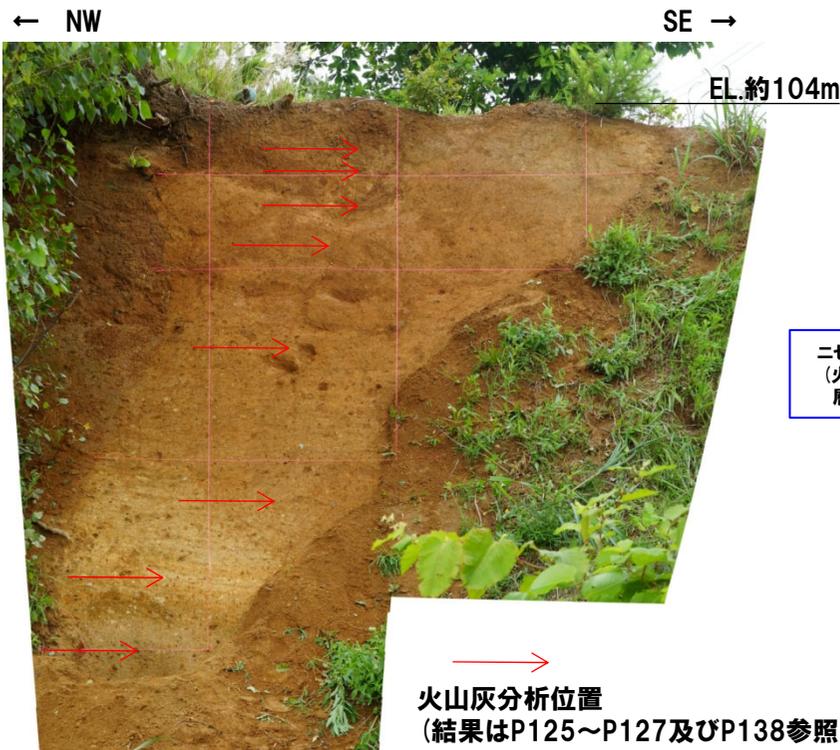
一部修正 (H28/9/30審査会合)

##### 【老古美地点②】

- 表土の下位にニセコ火山噴出物(火砕流堆積物)が分布する。
- なお、ニセコ火山噴出物(火砕流堆積物)上位の堆積物中に洞爺火山灰(Toya)を確認しており、ニセコ火山噴出物(火砕流堆積物)下部について、フィッシュトラック法年代測定値  $0.19 \pm 0.02\text{Ma}$  を得ている。

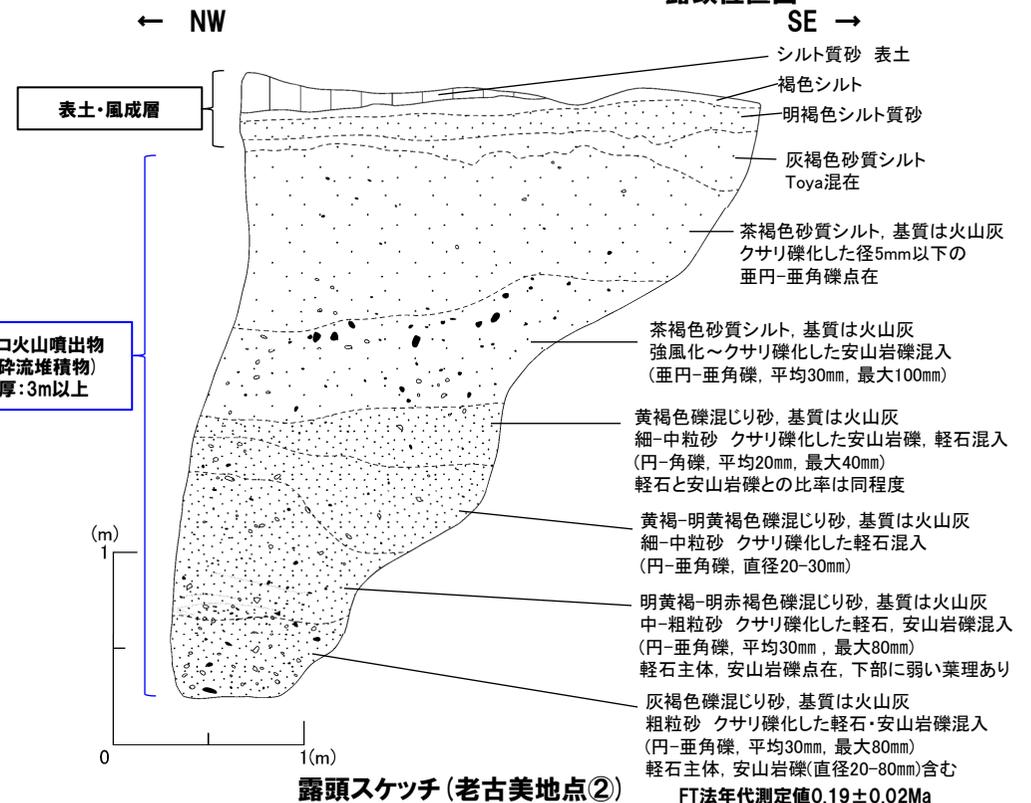


露頭位置図



火山灰分析位置  
(結果はP125~P127及びP138参照)

露頭状況 (老古美地点②)



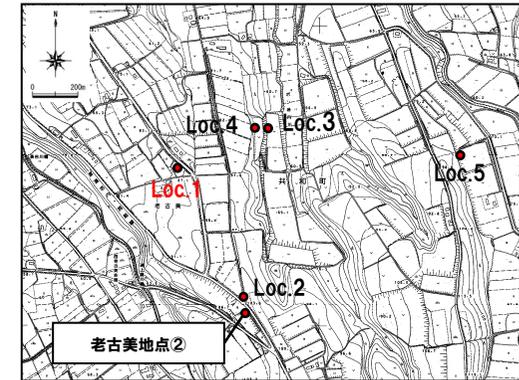
### 3.【敷地近傍(1)】老古美周辺において確認されるニセコ火山噴出物(火砕流堆積物)

#### ③-2 層厚(地質調査結果-Loc.1-)

一部修正(H28/9/30審査会合)

#### 【Loc.1】

○表土の下位にニセコ火山噴出物(火砕流堆積物)が分布する。



露頭位置図



ニセコ火山噴出物  
(火砕流堆積物)  
層厚: 8m以上

火山灰分析位置  
(結果はP125~P127参照)



露頭周辺状況(Loc.1)

露頭状況(Loc.1)

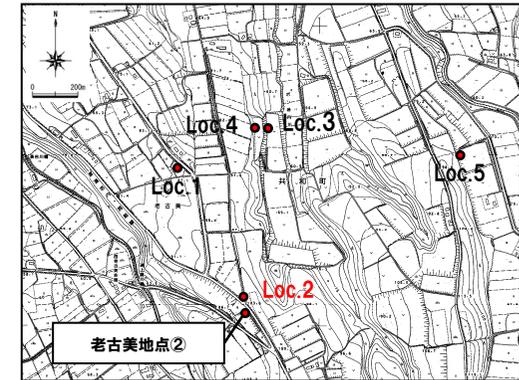
3.【敷地近傍(Ⅰ)】老古美周辺において確認されるニセコ火山噴出物(火砕流堆積物)

③-2 層厚(地質調査結果-Loc.2-)

一部修正(H28/9/30審査会合)

【Loc.2】

○表土の下位にニセコ火山噴出物(火砕流堆積物)が分布する。



露头位置図



ニセコ火山噴出物  
(火砕流堆積物)  
層厚:5m以上

→  
火山灰分析位置  
(結果はP125~P127参照)



露头周辺状況(Loc.2)

露头状況(Loc.2)

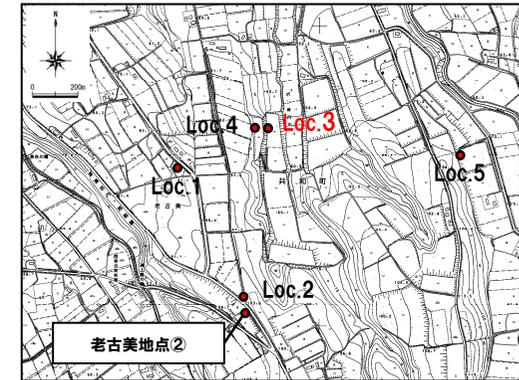
### 3.【敷地近傍(Ⅰ)】老古美周辺において確認されるニセコ火山噴出物(火砕流堆積物)

#### ③-2 層厚(地質調査結果-Loc.3-)

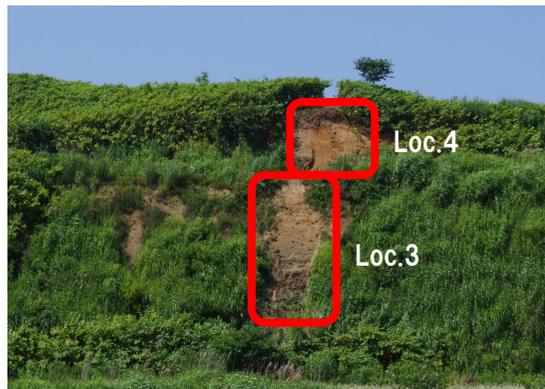
一部修正(H28/9/30審査会合)

#### 【Loc.3】

○盛土の下位にニセコ火山噴出物(火砕流堆積物)が分布する。



露头位置図



露头周辺状況(Loc.3, 4)



露头状況(Loc.3)

火山灰分析位置  
(結果はP125~P127参照)

ニセコ火山噴出物  
(火砕流堆積物)  
層厚:7m以上

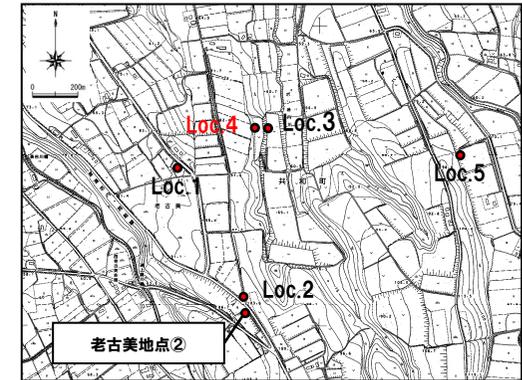
### 3.【敷地近傍(Ⅰ)】老古美周辺において確認されるニセコ火山噴出物(火砕流堆積物)

#### ③-2 層厚(地質調査結果-Loc.4-)

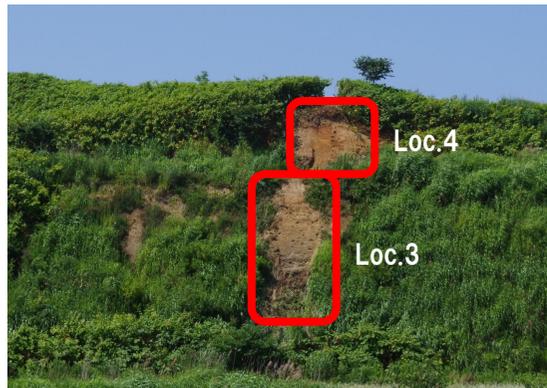
一部修正(H28/9/30審査会合)

#### 【Loc.4】

○表土の下位にニセコ火山噴出物(火砕流堆積物)が分布する。



露头位置図



露头周辺状況(Loc.3, 4)



露头状況(Loc.4)

火山灰分析位置  
(結果はP125~P127参照)

ニセコ火山噴出物  
(火砕流堆積物)  
層厚:8m以上

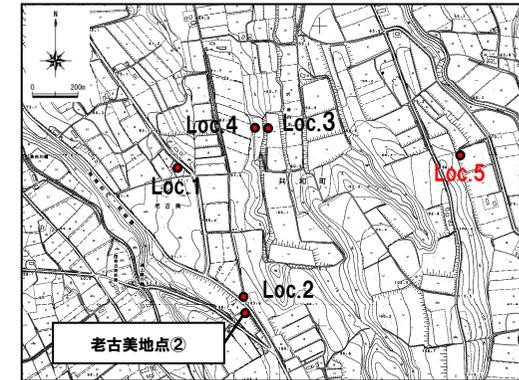
### 3. 【敷地近傍(Ⅰ)】老古美周辺において確認されるニセコ火山噴出物(火砕流堆積物)

#### ③-2 層厚(地質調査結果-Loc.5-)

一部修正(H28/9/30審査会合)

#### 【Loc.5】

○表土の下位にニセコ火山噴出物(火砕流堆積物)が分布する。



露頭位置図



露頭周辺状況(Loc.5)



露頭状況(Loc.5)

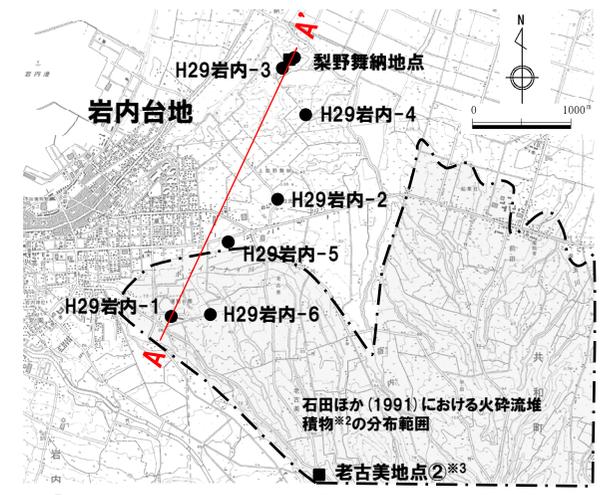
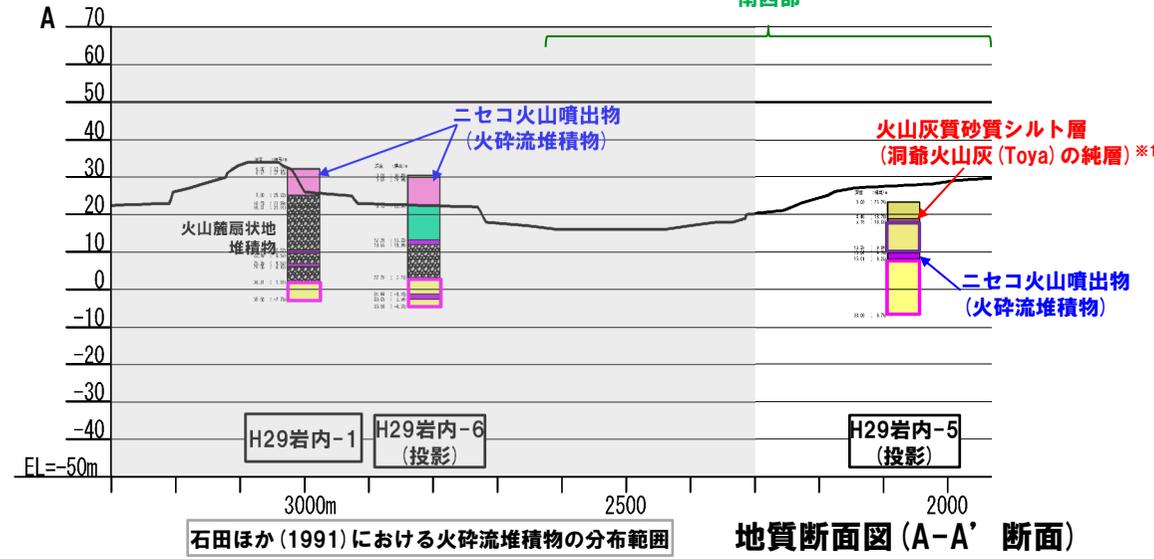
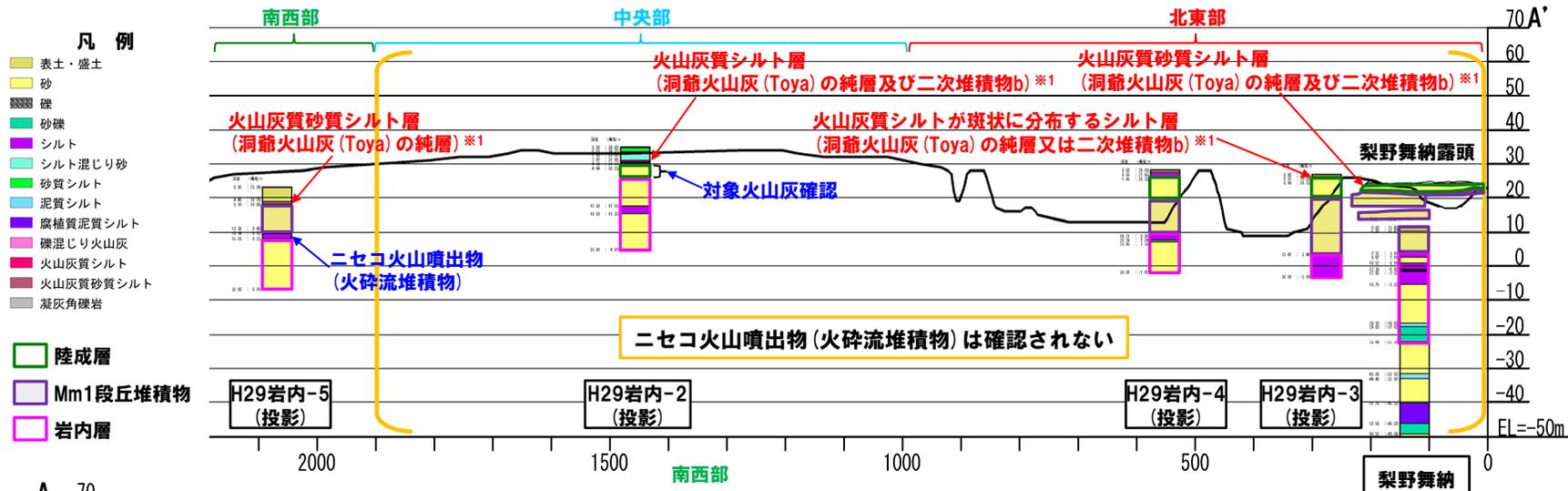
火山灰分析位置  
(結果はP125~P127参照)

ニセコ火山噴出物  
(火砕流堆積物)  
層厚:7m以上

### 3. 【敷地近傍(Ⅰ)】 考古美周辺において確認されるニセコ火山噴出物(火砕流堆積物)

#### ③-2 層厚(地質調査結果-岩内台地-)

一部修正(H30/5/11審査会合)



※2 当社が「ニセコ火山噴出物(火砕流堆積物)」と呼称しているものに該当する。  
 ※3 当該箇所(2)の火砕流堆積物から、フィッショントラック法年代測定値0.19±0.02Maを得ている。

※1  
 ○降下火砕物の純層及び二次堆積物については、以下のとおり定義した(純層、二次堆積物等への細区分の考え方については、P26~P27参照)。  
 ・「純層」:ある火山噴火イベントから噴出した降下火砕物(本質物)が直接降って形成された層であり、構成物が主に本質物からなる。  
 ・「二次堆積物」:いったん堆積した降下火砕物(本質物)が、再堆積して形成されたものであり、移動を示唆する堆積構造や現地性の異質物質等の混在が認められるもの。  
 このうち、構成物が主に本質物からなるものを「二次堆積物a」、構成物中における本質物の占める割合が純層及び二次堆積物aと比較して低いものを「二次堆積物b」と呼称する。  
 ○洞爺火山灰(Toya)の火山ガラスを多く含む火山灰質砂質シルト等の堆積物については、地質断面図において、降下火砕物由来として示しているが、火砕サージ由来か降下火砕物由来かを厳密に区分することは難しいと評価している。

調査位置図

## ③-2 層厚(地質調査結果-H29岩内-6地点-) (1/4)

一部修正(H30/5/11審査会合)

- 本地点においては、コア観察の結果、岩内層の上位の標高23.79~3.21m(深度6.70~27.28m)に火山麓扇状地堆積物及び標高29.94~23.79m(深度0.55~6.70m)に火山灰質シルト~軽石混じり砂礫層が認められる。
- 火山灰質シルト~軽石混じり砂礫層は、老古美地点②との層相対比から、老古美周辺で認められるニセコ火山噴出物(火砕流堆積物)に対比される。

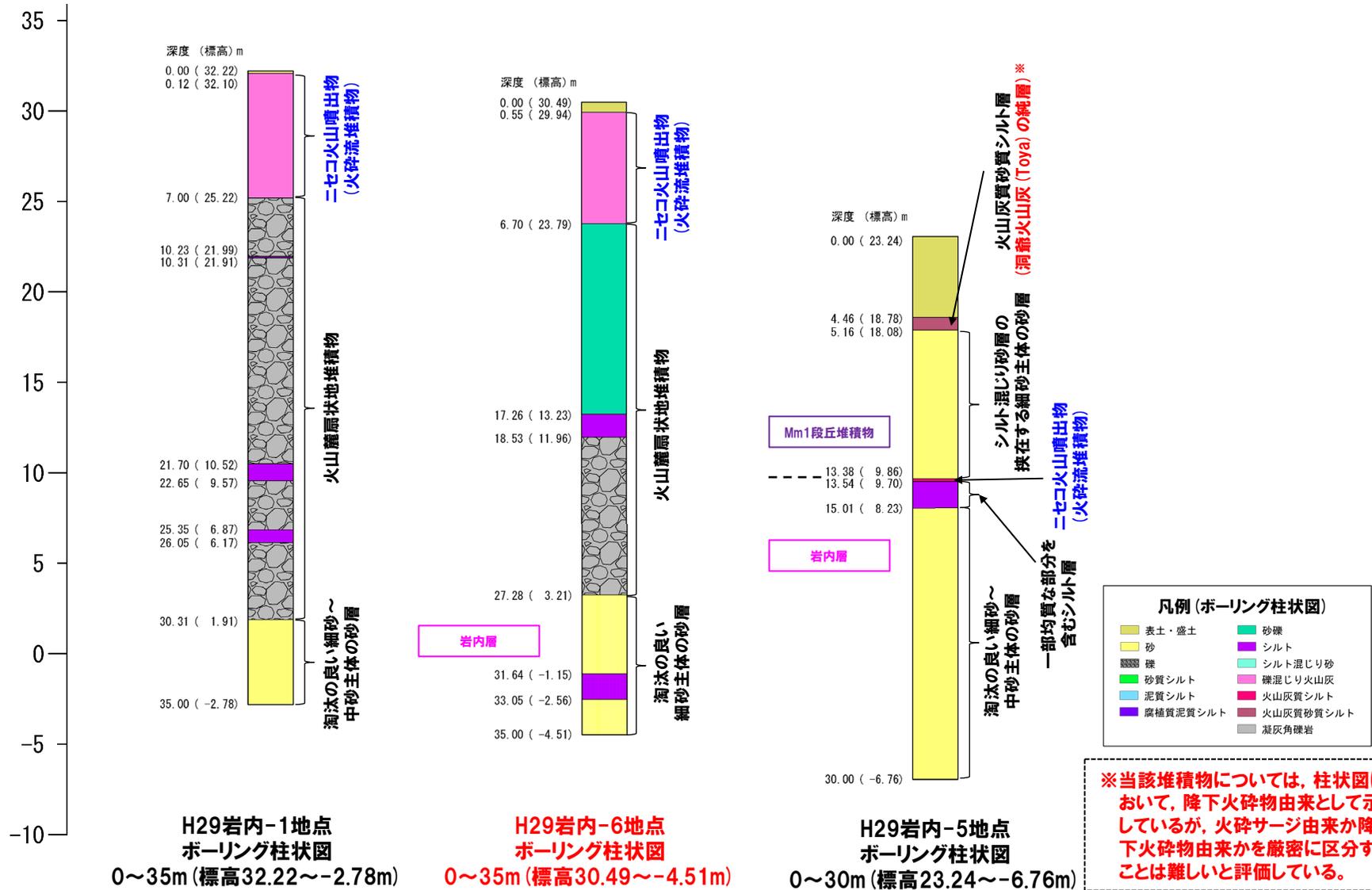


※1 当社が「ニセコ火山噴出物(火砕流堆積物)」と呼称しているものに該当する。  
 ※2 当該箇所の火砕流堆積物から、フィッシュオントラック法年代測定値 $0.19 \pm 0.02\text{Ma}$ を得ている。

調査位置図

③-2 層厚(地質調査結果-H29岩内-6地点-) (2/4)

一部修正(H30/5/11審査会合)

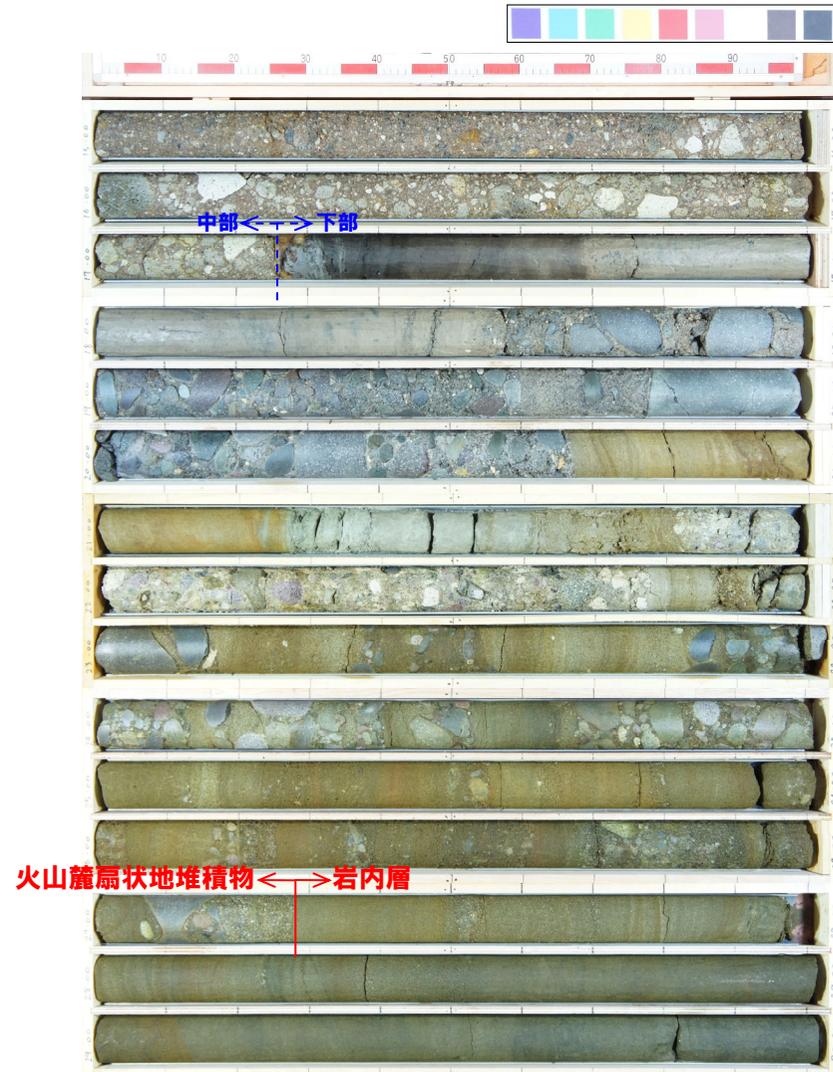


## ③-2 層厚(地質調査結果-H29岩内-6地点-) (3/4)

再掲(H30/5/11審査会合)



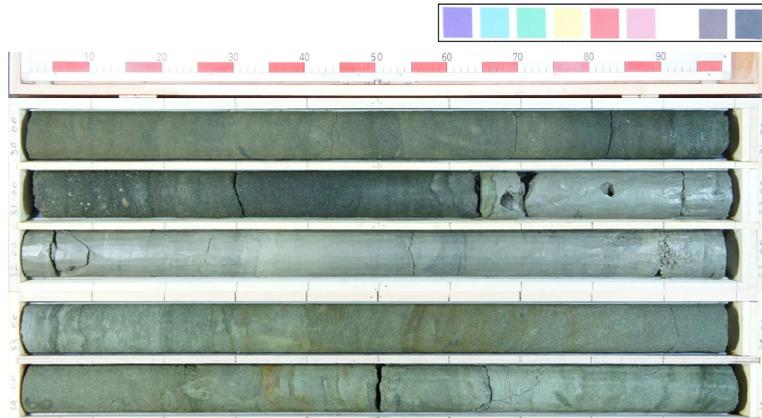
コア写真(深度0~15m, 標高30.49~15.49m)



コア写真(深度15~30m, 標高15.49~0.49m)

## ③-2 層厚(地質調査結果-H29岩内-6地点-) (4/4)

再掲(H30/5/11審査会合)



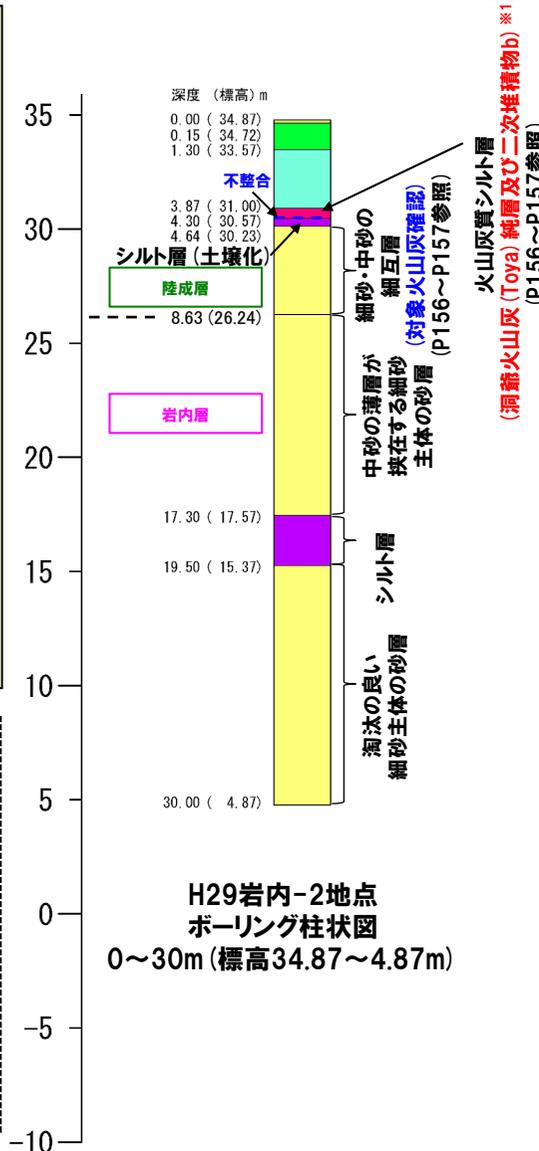
コア写真(深度30~35m, 標高0.49~-4.51m)

③-2 層厚(地質調査結果-H29岩内-2地点-) (1/4)

一部修正(H30/5/11審査会合)

- 本地点においては、コア観察の結果、岩内層の上位の標高30.57~26.24m(深度4.30~8.63m)に陸成層が認められる。
- また、陸成層上位の標高31.00~30.57m(深度3.87~4.30m)に火山灰質シルト層が認められる。
- 火山灰分析の結果、当該火山灰質シルト層のうち、標高30.67~30.57m(深度4.20~4.30m)については、基質部分に洞爺火山灰(Toya)の火山ガラスを多く含む(1000/3000粒子以上)ことから、洞爺火山灰(Toya)の純層(層厚:10cm)に区分される※1。
- また、標高31.00~30.67m(深度3.87~4.20m)については、直下に洞爺火山灰(Toya)の純層が認められること及び火山ガラスの粒子数が282~717粒子認められることから、洞爺火山灰(Toya)の二次堆積物b(層厚:33cm)に区分される※1。
- 本地点において、ニセコ火山噴出物(火砕流堆積物)は確認されない。

※1  
 ○降下火砕物の純層及び二次堆積物については、以下のとおり定義した(純層、二次堆積物等への細区分の考え方については、P26~P27参照)。  
 ・「純層」:ある火山噴火イベントから噴出した降下火砕物(本質物)が直接降って形成された層であり、構成物が主に本質物からなる。  
 ・「二次堆積物」:いったん堆積した降下火砕物(本質物)が、再堆積して形成されたものであり、移動を示唆する堆積構造や現地性の異質物質等の混在が認められるもの。  
 このうち、構成物が主に本質物からなるものを“二次堆積物a”, 構成物中における本質物の占める割合が純層及び二次堆積物aと比較して低いものを“二次堆積物b”と呼称する。  
 ○なお、当該堆積物については、降下火砕物由来として示しているが、火砕サージ由来か降下火砕物由来かを厳密に区分することは難しいと評価している。



※2 当社が「ニセコ火山噴出物(火砕流堆積物)」と呼称しているものに該当する。  
 ※3 当該箇所の火砕流堆積物から、フィッシュトラック法年代測定値 0.19±0.02Maを得ている。

調査位置図

## ③-2 層厚(地質調査結果-H29岩内-2地点-) (2/4)

一部修正(H29/3/10審査会合)



□:火山灰分析試料主要採取位置

コア写真(深度0~15m, 標高34.87~19.87m)



コア写真(深度15~30m, 標高19.87~4.87m)

③-2 層厚(地質調査結果-H29岩内-2地点-) (3/4)

一部修正(H30/5/11審査会合)

対象火山灰の主要範囲(屈折率)



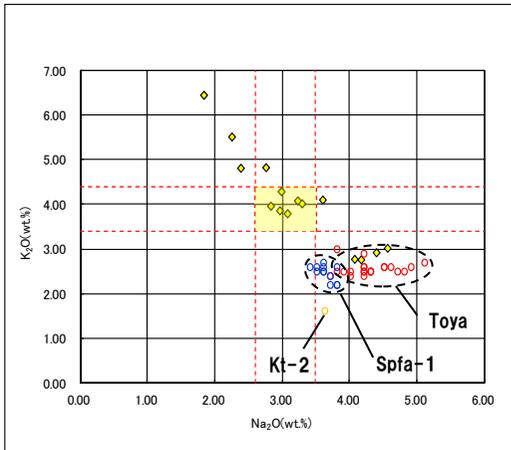
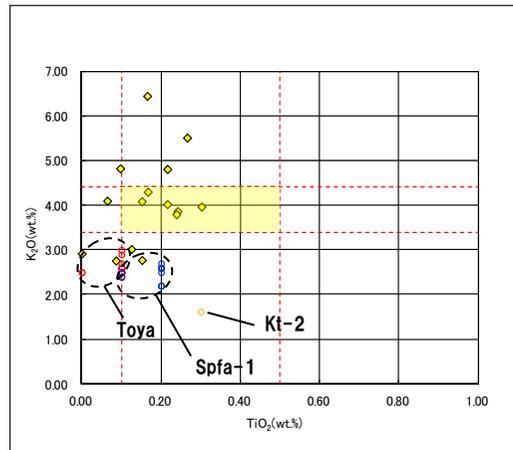
■ バブルウォール(Bw)タイプ  
■ ハミス(Hm)タイプ  
■ 低発泡(L)タイプ

Op x: 斜方輝石  
GH o: 緑色普通角閃石  
Cum : カミングトン閃石

→ : 洞爺火山灰 (Toya) の降灰層準  
□ : 洞爺火山灰 (Toya) の二次堆積物b  
■ : 洞爺火山灰 (Toya) の純層

当該堆積物は、火山灰分析結果の図において、降下火砕物由来として示しているが、火砕サージ由来か降下火砕物由来かを厳密に区別することは難しいと評価している。

火山灰分析結果



◇ H29岩内-2-p □ Toya(※1) ○ Kt-2(※2) ● Spfa-1(Spfa)(※1)

火山ガラスのK<sub>2</sub>O-TiO<sub>2</sub>図(左図), K<sub>2</sub>O-Na<sub>2</sub>O図(右図)

※岩内平野南方の老古美周辺において確認されるニセコ火山噴出物(火砕流堆積物)に対比される火山灰を「対象火山灰」と呼称している。

(参考) 洞爺火山灰 (Toya) の屈折率(町田・新井, 2011より)

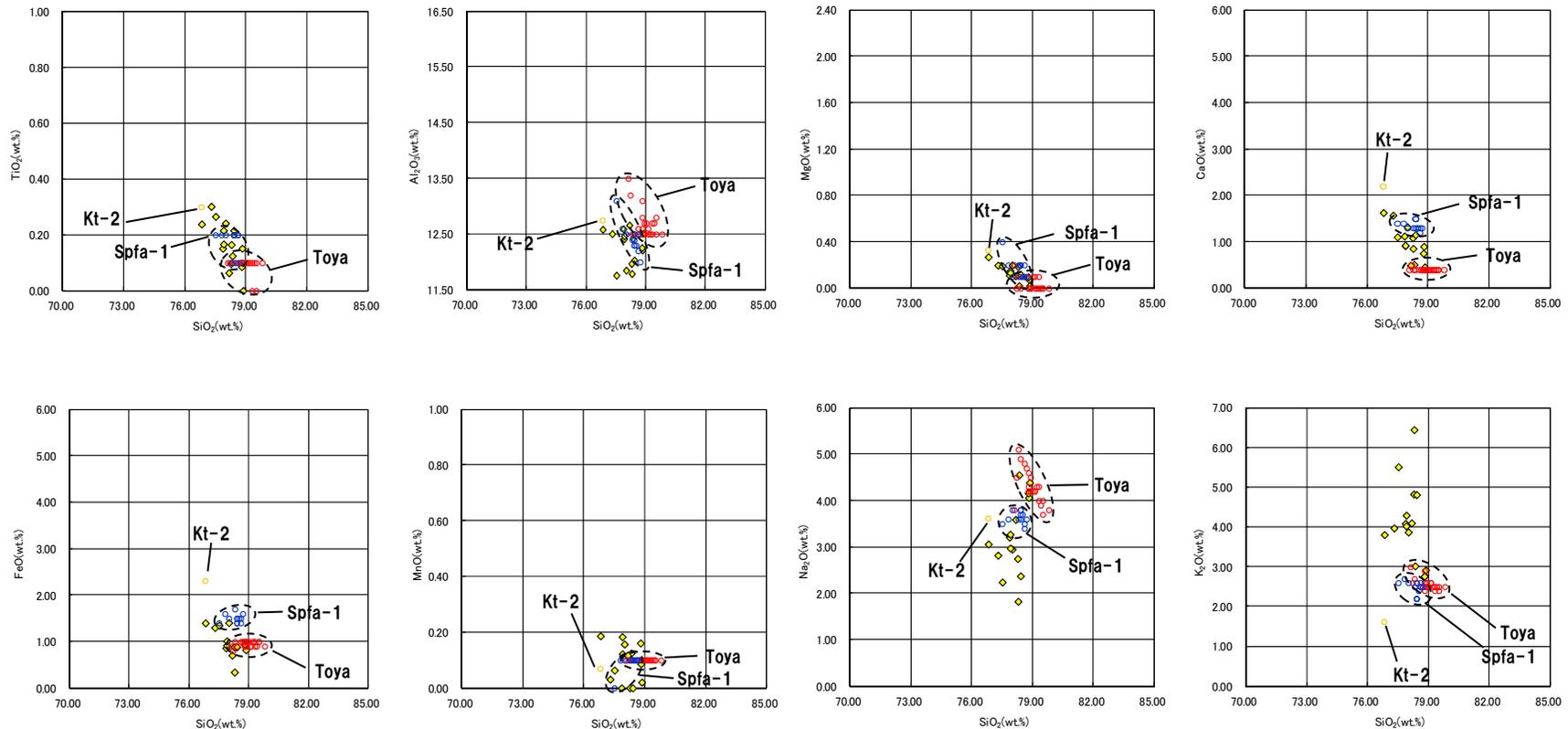
テフラ名	特徴	火山ガラス	斜方輝石	角閃石
Toya	バブルウォールタイプ・ハミスタイプの火山ガラス主体	1.494-1.498	1.711-1.761 (1.758-1.761, 1.712-1.729 bimodal)	1.674-1.684

--- 対象火山灰の主要範囲(火山ガラスのTiO<sub>2</sub>, Na<sub>2</sub>O, K<sub>2</sub>O)

※1 町田・新井(2011), ※2 青木・町田(2006)

③-2 層厚(地質調査結果-H29岩内-2地点-) (4/4)

再掲(H30/5/11審査会合)



◆ H29岩内-2-p    ● Toya(※1)    ◆ Kt-2(※2)    ● Spfa-1(Spfi)(※1)

※1 町田・新井(2011), ※2 青木・町田(2006)

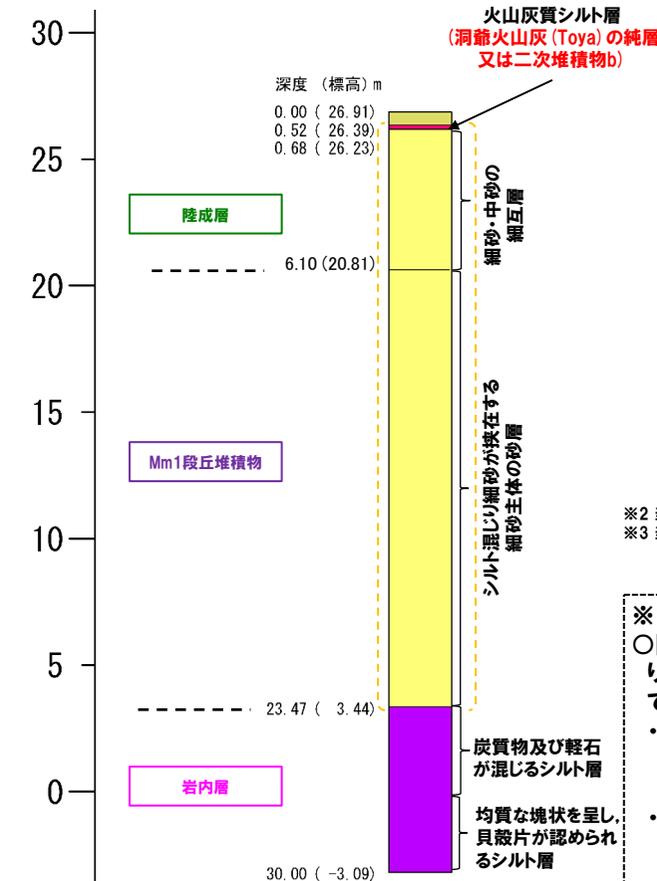
火山ガラスの主元素組成(ハーカー図)

3. 【敷地近傍(1)】 老古美周辺において確認されるニセコ火山噴出物(火砕流堆積物)

③-2 層厚(地質調査結果-H29岩内-3地点-) (1/2)

一部修正(H30/5/11審査会合)

- 本地点においては、コア観察の結果、岩内層(標高3.44m以深)の上位の標高20.81~3.44mにMm1段丘堆積物及び標高26.23~20.81mに陸成層が認められる。
- また、陸成層の上位の標高26.39~26.23m(深度0.52~0.68m)に火山灰質シルト層が認められる。
- 本地点においては、後述する梨野舞納地点の露頭及びボーリングと同様な標高に同様な層相が連続することから、当該火山灰質シルト層は、梨野舞納地点の火山灰質砂質シルト層(標高約24m)に対比されると考えられる。
- このため、当該火山灰質シルト層は、洞爺火山灰(Toya)の純層又は二次堆積物b(純層と二次堆積物bを合わせた層厚:16cm)に区分される※1。
- 本地点において、ニセコ火山噴出物(火砕流堆積物)は確認されない。



※2 当社が「ニセコ火山噴出物(火砕流堆積物)」と呼称しているものに該当する。  
 ※3 当該箇所の火砕流堆積物から、フィッショントラック法年代測定値0.19±0.02Maを得ている。

調査位置図

凡例(ボーリング柱状図)

表土・盛土	砂礫	ボーリングコアにおいて梨野舞納地点と同様な標高に同様な層相が認められる区間
砂	シルト	
礫	シルト混じり砂	
砂質シルト	礫混じり火山灰	
泥質シルト	火山灰質シルト	
腐植質泥質シルト	火山灰質砂質シルト	
	凝灰角礫岩	

H29岩内-3地点  
 ボーリング柱状図  
 0~30m  
 (標高26.91~-3.09m)

※1  
 ○降下火砕物の純層及び二次堆積物については、以下のとおり定義した(純層、二次堆積物等への細区分の考え方については、P26~P27参照)。  
 ・「純層」:ある火山噴火イベントから噴出した降下火砕物(本質物)が直接降って形成された層であり、構成物が主に本質物からなる。  
 ・「二次堆積物」:いったん堆積した降下火砕物(本質物)が、再堆積して形成されたものであり、移動を示唆する堆積構造や現地性の異質物質等の混在が認められるもの。  
 このうち、構成物が主に本質物からなるものを“二次堆積物a”、構成物中における本質物の占める割合が純層及び二次堆積物aと比較して低いものを“二次堆積物b”と呼称する。  
 ○なお、洞爺火山灰(Toya)の火山ガラスを多く含む堆積物については、降下火砕物由来として示しているが、火砕サージ由来か降下火砕物由来かを厳密に区分することは難しいと評価している。

## ③-2 層厚(地質調査結果-H29岩内-3地点-) (2/2)

一部修正(H29/3/10審査会合)



コア写真(深度0~15m, 標高26.91~11.91m)

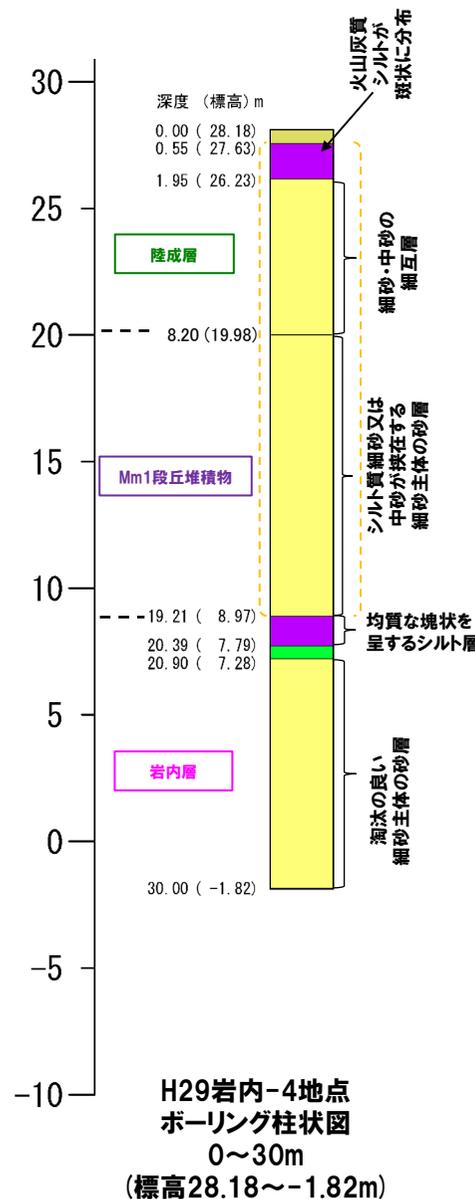


コア写真(深度15~30m, 標高11.91~-3.09m)

③-2 層厚 (地質調査結果-H29岩内-4地点-) (1/2)

一部修正 (H30/5/11審査会合)

- 本地点においては、コア観察の結果、岩内層(標高8.97m以深)の上位の標高19.98~8.97mにMm1段丘堆積物及び標高26.23~19.98mに陸成層が認められる。
- また、陸成層の上位の標高27.63~26.23m(深度0.55~1.95m)に、火山灰質シルトが斑状に分布するシルト層が認められる。
- 本地点においては、後述する梨野舞納地点の露頭及びボーリングと同様な標高に同様な層相が連続することから、当該シルト層は、梨野舞納地点の火山灰質砂質シルト層(標高約24m)に対比されると考えられる。
- しかし当該シルト層は、火山灰質シルトが斑状に分布することから、洞爺火山灰(Toya)堆積以降の擾乱が示唆されるため、洞爺火山灰(Toya)の層厚を評価することはできない。
- 本地点において、ニセコ火山噴出物(火砕流堆積物)は確認されない。



※1 当社が「ニセコ火山噴出物(火砕流堆積物)」と呼称しているものに該当する。  
 ※2 当該箇所の火砕流堆積物から、フィッショントラック法年代測定値0.19±0.02Maを得ている。

調査位置図

凡例(ボーリング柱状図)

表土・盛土	砂礫	ボーリングコアにおいて梨野舞納地点と同様な標高に同様な層相が認められる区間
砂	シルト	
礫	シルト混じり砂	
砂質シルト	礫混じり火山灰	
泥質シルト	火山灰質シルト	
腐植質泥質シルト	火山灰質砂質シルト	
	凝灰角礫岩	

## ③-2 層厚(地質調査結果-H29岩内-4地点-) (2/2)

一部修正(H30/5/11審査会合)



コア写真(深度0~15m, 標高28.18~13.18m)



コア写真(深度15~30m, 標高13.18~-1.82m)

## ③-2 層厚(地質調査結果-梨野舞納地点-) (1/8)

一部修正(H31/2/22審査会合)

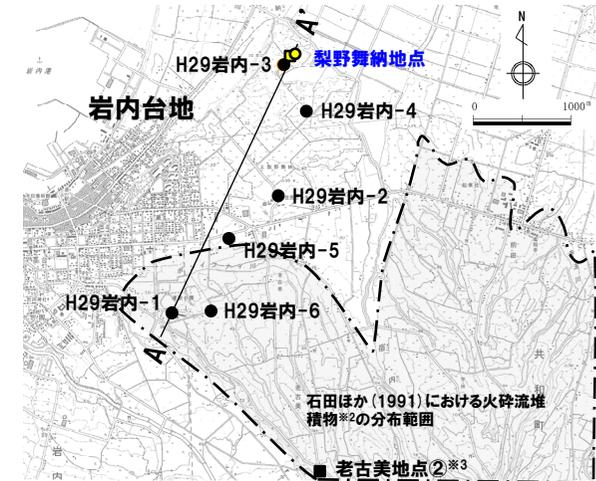
- 本地点においては、露頭及びコア観察の結果、岩内層の上位の標高約4~22mにMm1段丘堆積物及び標高約22~24mに陸成層が認められる。
- また、陸成層の上位に、火山灰質砂質シルト層(標高約24m)が認められる。
- 火山灰分析の結果、当該火山灰質シルト層のうち、標高24.35~24.05mについては、基質部分に洞爺火山灰(Toya)の火山ガラスを多く含む(1000/3000粒子以上)ことから、洞爺火山灰(Toya)の純層(層厚:30cm)に区分される※1。
- また、標高24.65~24.35mについては、直下に洞爺火山灰(Toya)の純層が認められること及び火山ガラスの粒子数が309~941粒子認められることから、洞爺火山灰(Toya)の二次堆積物b(層厚:30cm)に区分される。
- 本地点において、ニセコ火山噴出物(火砕流堆積物)は確認されない。

※1

○降下火砕物の純層及び二次堆積物については、以下のとおり定義した(純層、二次堆積物等への細区分の考え方については、P26~P27参照)。

- ・「純層」:ある火山噴火イベントから噴出した降下火砕物(本質物)が直接降って形成された層であり、構成物が主に本質物からなる。
  - ・「二次堆積物」:いったん堆積した降下火砕物(本質物)が、再堆積して形成されたものであり、移動を示唆する堆積構造や現地性の異質物質等の混在が認められるもの。
- このうち、構成物が主に本質物からなるものを「二次堆積物a」、構成物中における本質物の占める割合が純層及び二次堆積物aと比較して低いものを「二次堆積物b」と呼称する。

○なお、洞爺火山灰(Toya)の火山ガラスを多く含む堆積物については、降下火砕物由来としているが、火砕サージ由来か降下火砕物由来かを厳密に区分することは難しいと評価している。



※2 当社が「ニセコ火山噴出物(火砕流堆積物)」と呼称しているものに該当する。

※3 当該箇所の火砕流堆積物から、フィッショントラック法年代測定値 $0.19 \pm 0.02\text{Ma}$ を得ている。

調査位置図



③-2 層厚 (地質調査結果-梨野舞納地点-) (3/8)

一部修正 (H29/3/10審査会合)

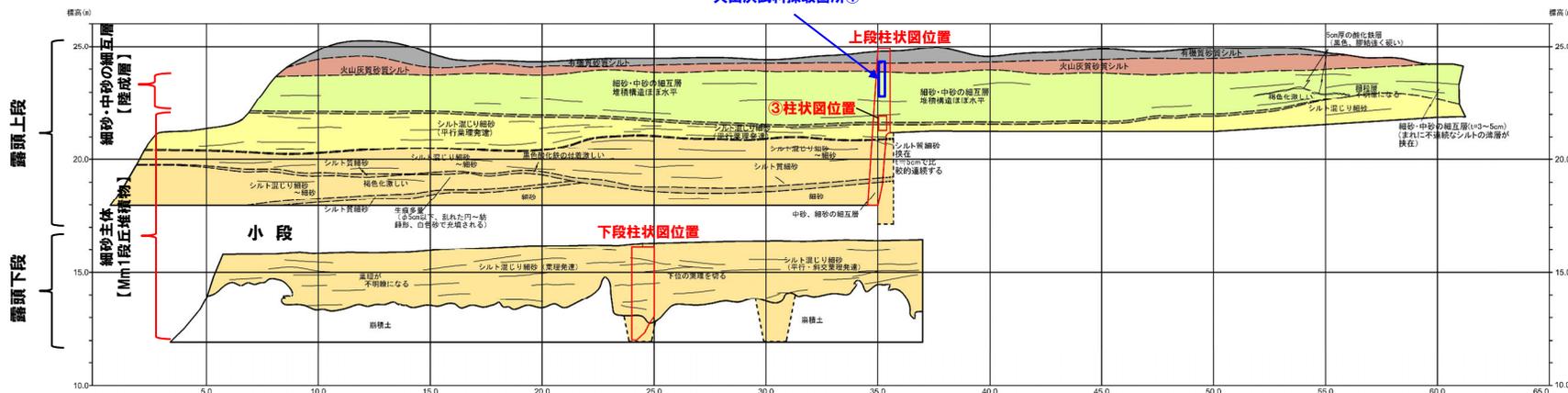
← SE

NW →

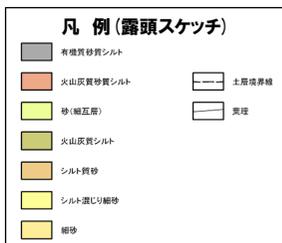


梨野舞納露頭写真

火山灰試料採取箇所①

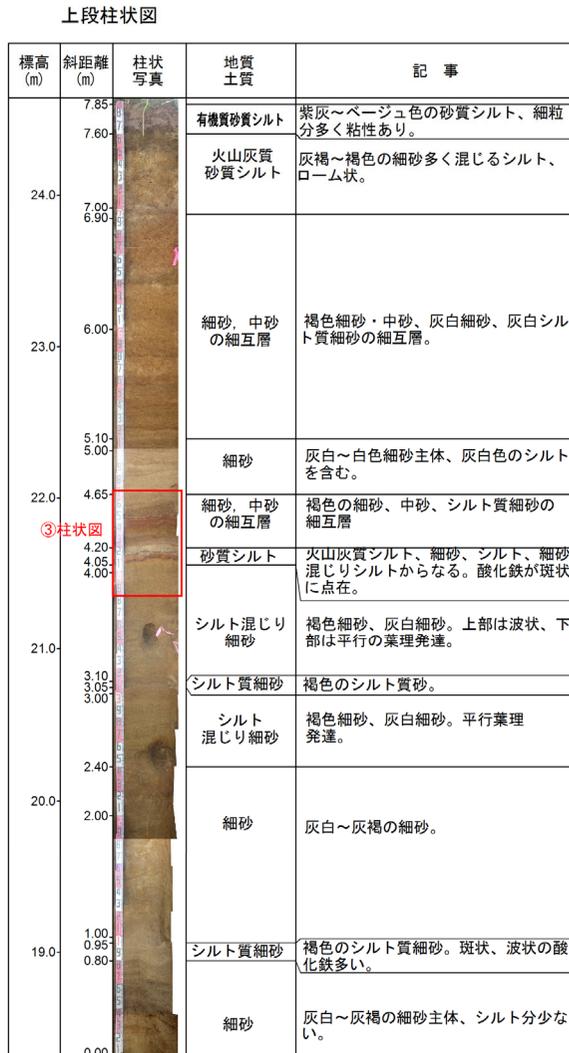


梨野舞納露頭スケッチ



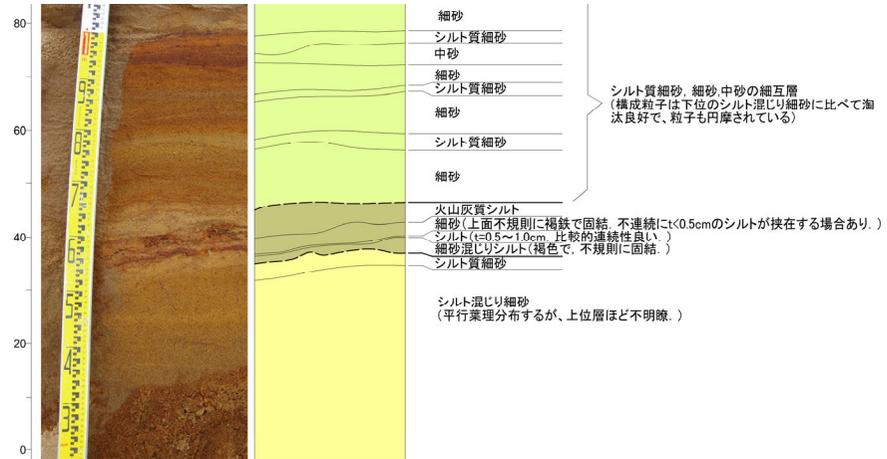
③-2 層厚 (地質調査結果-梨野舞納地点-) (4/8)

再掲 (H29/3/10審査会合)

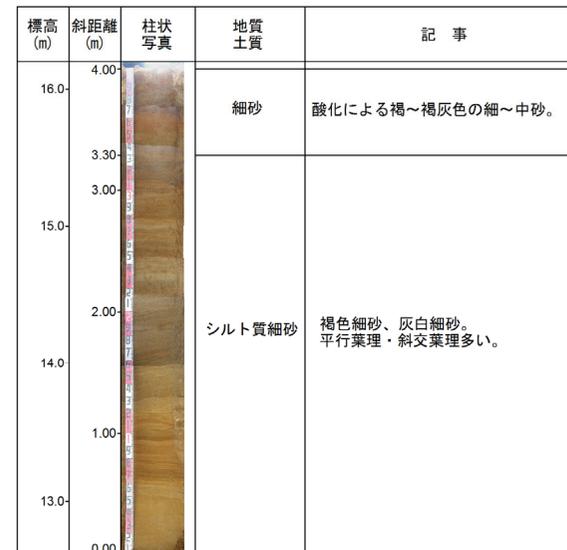


③柱状図

③柱状図



下段柱状図

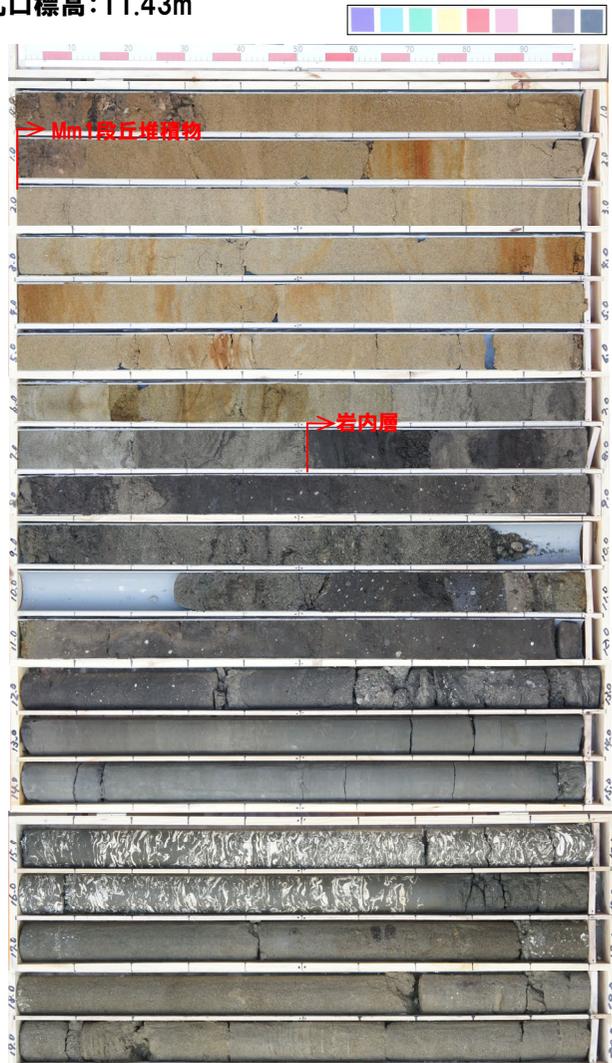


梨野舞納露頭スケッチ 拡大柱状図

## ③-2 層厚(地質調査結果-梨野舞納地点-) (5/8)

一部修正(H27/5/29審査会合)

孔口標高:11.43m



コア写真(深度0~20m, 標高11.43~-8.57m)

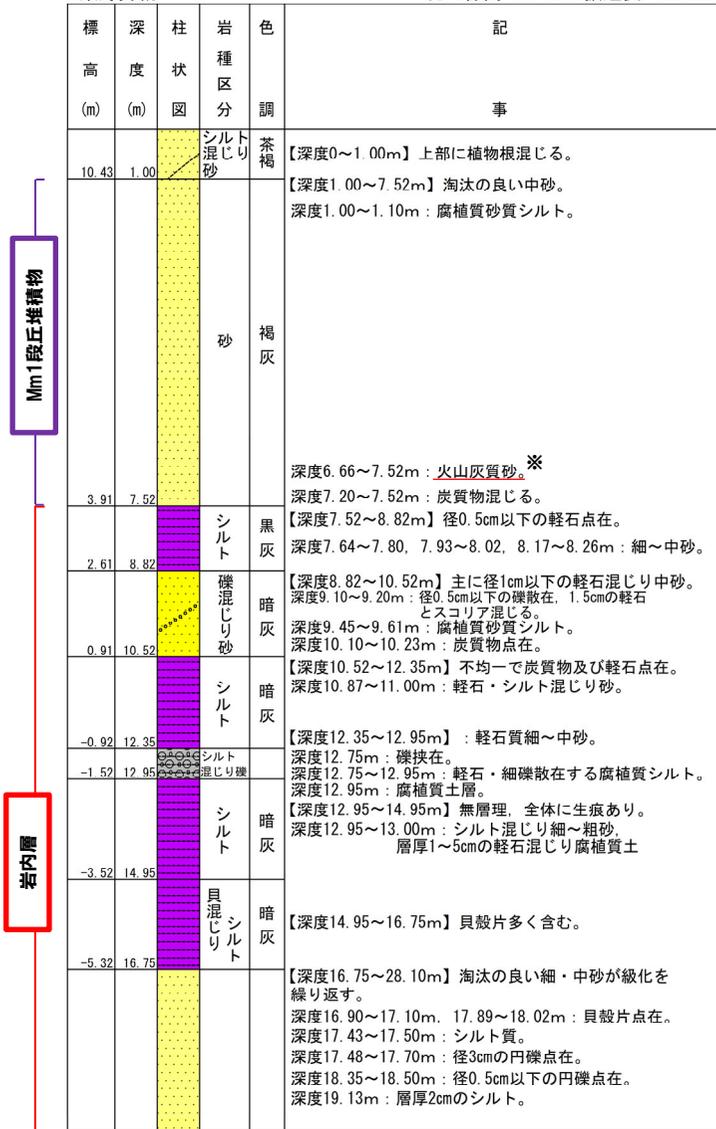


コア写真(深度20~40m, 標高-8.57~-28.57m)

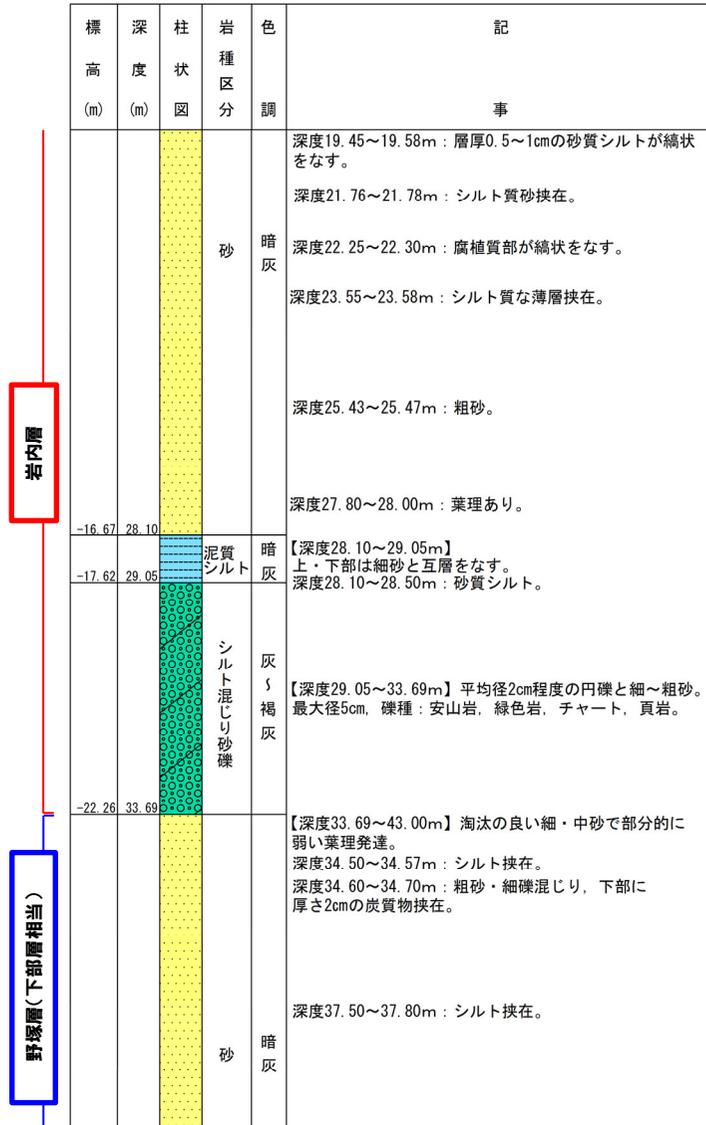
③-2 層厚(地質調査結果-梨野舞納地点-) (6/8)

一部修正(H27/5/29審査会合)

梨野舞納 孔口標高 11.43m 掘進長 100.00m



ボーリング柱状図(深度0~20m)



ボーリング柱状図(深度20~40m)

※ 柱状図には、“火山灰質”と記載されているが、R3.10.14審査会合以降に実施した火山灰分析の結果、主に火山砕屑物からなるものではないと評価した(P169参照)。

凡例

- シルト
- 貝混じりシルト
- 泥質シルト
- 砂
- シルト混じり砂
- 礫混じり砂
- シルト混じり砂礫
- シルト混じり礫

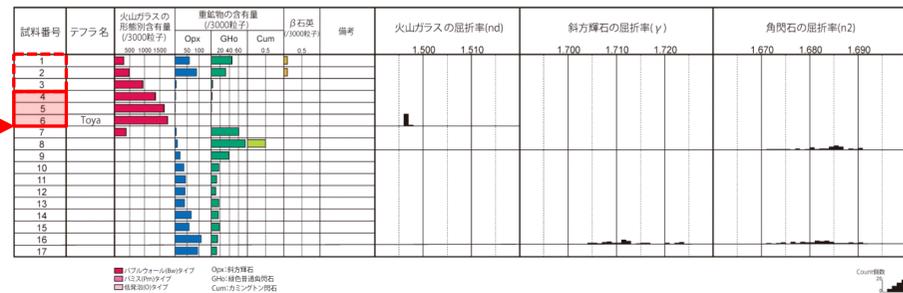
3. 【敷地近傍(Ⅰ)】老古美周辺において確認されるニセコ火山噴出物(火砕流堆積物)

③-2 層厚(地質調査結果-梨野舞納地点-) (7/8)

一部修正 (H29/3/10審査会合)



火山灰試料採取箇所① 露頭柱状図



→ : 洞爺火山灰 (Toya) □ : 洞爺火山灰 (Toya) の二次堆積物の降灰層準 □ : 洞爺火山灰 (Toya) の純層

当該堆積物は、火山灰分析結果の図において、降下火砕物由来として示しているが、火砕サージ由来か降下火砕物由来かを厳密に区分することは難しいと評価している。

火山灰試料採取箇所① 火山灰分析結果

(参考) 洞爺火山灰の屈折率(町田・新井, 2011より)

特徴	火山ガラス	斜方輝石	角閃石
バブルウォールタイプ・バミタイプの火山ガラス主体	1.494-1.498	1.711-1.761 (1.758-1.761, 1.712-1.729 bimodal) ※2	1.674-1.684

※2 括弧内の値はモードまたは集中度のよい範囲。

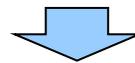
○降下火砕物の純層及び二次堆積物については、以下のとおり定義した(純層、二次堆積物等への細区分の考え方については、P26~P27参照)。  
 ・「純層」:ある火山噴火イベントから噴出した降下火砕物(本質物)が直接降って形成された層であり、構成物が主に本質物からなる。  
 ・「二次堆積物」:いったん堆積した降下火砕物(本質物)が、再堆積して形成されたものであり、移動を示唆する堆積構造や現地性の異質物質等の混在が認められるもの。  
 このうち、構成物が主に本質物からなるものを「二次堆積物a」、構成物中における本質物の占める割合が純層及び二次堆積物aと比較して低いものを「二次堆積物b」と呼称する。

③-2 層厚(地質調査結果-梨野舞納地点-) (8/8)

○梨野舞納ボーリングにおいては、柱状図に“火山灰質”の記載がなされている堆積物が、下表のとおり認められる。

深度(m)	標高(m)	層相	柱状図記事(抜粋)
1.00~7.52	10.43~3.91	砂	○深度6.66~7.52m:火山灰質砂。

○本ボーリングにおける上記の堆積物については、R3.10.14審査会合以降に実施した火山灰分析の結果に基づき、地層区分を明確にした。



【深度1.00~7.52m(標高10.43~3.91m):砂】

・深度6.66~7.52mを対象とした火山灰分析(組成分析)の結果、火山ガラスの粒子数が少ない(9~36/3000粒子)ことから、主に火山砕屑物からなるものではなく、火山ガラスが混在する砂に区分される。



火山灰分析結果  
(深度6.74~6.75m, 7.06~7.07m, 7.20~7.21m, 7.48~7.50m)

1. 敷地及び敷地近傍の火山噴出物に関する検討 .....	P. 9
2. 【敷地近傍(Ⅰ)】幌似周辺で実施したボーリング調査結果 .....	P. 75
3. 【敷地近傍(Ⅰ)】老古美周辺において確認されるニセコ火山噴出物(火砕流堆積物) .....	P.121
<b>4. 【敷地近傍(Ⅱ)】岩内平野西部で実施したボーリング調査結果 .....</b>	<b>P.171</b>
5. 【敷地近傍(Ⅱ)】岩内平野西部で実施したボーリング調査結果 物の有無に関する検討 .....	P.225
6. 【敷地近傍(Ⅱ)】岩内平野西部で実施したボーリング調査結果 【調査概要】 .....	P.425
7. 支笏湖 【調査位置図】 .....	P.493
8. ワイロ 距離と層厚に関する検討 .....	P.513
参考文献	P.522

#### 4. 【敷地近傍(Ⅱ)】岩内平野西部で実施したボーリング調査結果

##### 【調査概要】

##### 【調査位置図】

- ①-1 梨野舞納地点(露頭写真, スケッチ及び柱状図)
- ①-2 梨野舞納地点(火山灰分析結果)
- ①-3 梨野舞納地点(ボーリングコア写真)
- ①-4 梨野舞納地点(ボーリング柱状図)
- ②-1 H26共和-1地点(ボーリングコア写真)
- ②-2 H26共和-1地点(ボーリング柱状図)
- ③-1 H26共和-2地点(ボーリングコア写真)
- ③-2 H26共和-2地点(ボーリング柱状図)
- ④-1 H26共和-3地点(ボーリングコア写真)
- ④-2 H26共和-3地点(ボーリング柱状図)
- ⑤-1 H26共和-4地点(ボーリングコア写真)
- ⑤-2 H26共和-4地点(ボーリング柱状図)
- ⑥-1 H26共和-5地点(ボーリングコア写真)
- ⑥-2 H26共和-5地点(ボーリング柱状図)
- ⑦-1 H26共和-6地点(ボーリングコア写真)
- ⑦-2 H26共和-6地点(ボーリング柱状図)
- ⑧-1 H26共和-7地点(ボーリングコア写真)
- ⑧-2 H26共和-7地点(ボーリング柱状図)